
もしも『CLOCK ZERO』の主人公が『薄桜鬼』の世界へ飛ばされてしまったら。

muu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも『CLOCK ZERO』の主人公が『薄桜鬼』の世界へ飛ばされてしまったら。

【Nコード】

N8495U

【作者名】

muu

【あらすじ】

『どうやらここは、新撰組の世界…君がいた世界とはまた違った世界みたいですなー』

CLOCK ZEROの主人公「九楼撫子」が飛ばされてしまった世界。そこはなんと幕末の動乱の中に生きる人切り集団、『新撰組』が生きる世界だった。

その世界に生きる新撰組に軟禁されている少女は、入れ替わりに撫子の世界へと飛ばされてしまったという。

お互いがお互いの世界へと帰るため、『新撰組』の人間達と関わり合いながら、撫子は『新撰組』の事件に巻き込まれて行くのだった！

CLOCK ZEROのネタバレ含みます。ご注意ください。

第一幕「日常が変わる日」(前書き)

CLOCK ZEROのネタバレ壮大に含みます。ご注意ください。

第一幕「日常が変わる日」

秋霖学園の地下、そこではこの学園の教師である神賀旭が毎夜何かの装置を作っていた。

「うーん…」

「なんだなんだ！？珍しく困ったような声出してよ！」

そこには彼一人しかいないはずなのに、もう一人人間の声が聞こえてくる。その声はとてもじゃないが、綺麗とは言えない言葉遣いをしていた。

「それがね、あの子をあっちの世界へ連れて行くための機械の調子が悪いみたいなんだ」

神賀旭はその声に驚いた様子もなく、平然と問われたことに答える。

「これはもう、『核』を一度外してどこが悪いのか探して直すしかないなあ…」

「つーことは、『あっちの世界』の『核』も持ってこないといけねーじゃん」

「そうだね。とは言ってもビショップがすぐに持ってきてくれたから良いんだけどね」

『ビショップ』とは、『あっちの世界』の神賀旭の部下だ。細い目に、夜の街を歩いてそうな格好が特徴の男である。

「ということだね、ちよつとカエルくんに手伝ってもらうよ」

「あー…めんどくせえなあ」

「まあまあ、そう言わずに…ね？」

そう言って、自らの腰についているカエルのストラップを取り出し

た。どうやら先ほどから神賀が話していたのはこのストラップだったらしい。

神賀はカエルのストラップに小さな赤い宝石のようなものをくくりつけ、そこにコードやら何やらをくっつけて作業を始めた。

作業は朝まで続いた。

「あ…もうこんな時間っ」

神賀が『核』と呼ぶものの修理は終わったようだが、集中しすぎて夜が明けてしまっていたのだ。時刻は8時近い。

神賀は急いで支度をして、机のものを全て放り投げた格好で地下から出ていった。

これが、事件の原因になってしまつとは知らずに…。

「あ、鷹斗おはよう」

「撫子、おはよう。理一郎もおはよう」

「…ああ」

秋霖学園6年の教室でそんないつもの会話が繰り返される。

最初にあいさつをしていたのは九楼撫子。九楼財閥の一人娘である。

「ねえ撫子、今日の数学の宿題やってきた？」

「ええ、やってきたわよ。どうして？」

「わからない問題があるんだ」

親しげに笑顔で明るく撫子に声をかけてきたのは、今秋にこの学園に転校してきた海棠鷹斗。彼は世界的に有名な製薬会社海棠グループの一人息子でとても頭が良い。

「鷹斗にわからない問題があつたら、私でもわからないわ」

「そうかなあ…」

「それに、数学なら理一郎の方が得意よ。ねえ、理一郎」

「俺に振るなよ…」

面倒くさそうに答えたのは撫子の幼なじみでもある加納理一郎。

加納外務大臣の息子で、とにかく誰に対しても無愛想なのが特徴だ。

「で、どこだ？」

「えつと…ここの証明の問題なんだけど、こんな簡単な答えで良いの？それに、こっちの問題の円周率は3で求めるんだっけ？俺、3・141592でやったんだけど…」

「…実はお前、馬鹿にしてるだろ」

「ええっ？」

「大人も子ども聞いたら怒られそうな質問よね…」

そんな和やかな会話をしていると、突然教室のドアが開いて見知った顔が洗われた。

「あら、終夜じゃない。どうしたの？」

そこに現れたのは撫子含む三人が参加している「特別授業」のメンバー。一つ下の学年にいる時田終夜だった。まるで中学生のように発育している体と容姿は6年生の教室でもかなり目立つ。

「ふむ…どうしてそなたらがここにおるのだ？」

「それを聞きたいのはこっちの台詞よ…」

どうせまたぼんやりして道に迷ってしまったのだろうと思っていると、終夜は「そうだ！」と何かを思いだしたらしい。

「そなたに渡したいものがあるのだ」

そう言つてごそそと自らのポケットから何かを取り出す。

その手に乗っていたのは赤い石。宝石のようにきらきらと周りの光を取り込んで輝いている。

「今日、散歩していた時にみつけてな。そなたに『ふれぜん』しようと思ったのだ。本には女性に贈り物を渡すと『こうかんど』が上がって『ふらぐ』が立つと書いてあったからな」

「いつも思うけど、終夜の読んでる本って何…？」

小声で撫子は突っ込むが終夜は気にもとめない。

「それを手に取ったときになにやら光っていたのでな。持ってきたのだ」

「あ…ありがとう。嬉しいわ」

彼の行動はとにかく、何かをプレゼントしてくれる気持ちは嬉しかったので素直にお礼を言った。

「というかお前、もうチャイム鳴ってるぞ。帰れ」

「そうだね、もう先生来てるし」

二人の会話を黙って聞いていた二人だったが、担任の存在を確認して終夜にそう促した。理一郎はとにかく、鷹斗も若干機嫌が悪そうに見えたのは気のせいだろうか…？

「おお、そうだったな。それでは、また会おうぞ諸君」

終夜はあっさり二人の言葉を受け止め、とととと教室から出ていった。途中「そなた、私の教室はどこか知らぬか？」「時田くん…授業はサボってはいけませんからね。ちなみに、君の教室はあつちです」「うむ、恩にきるぞ」と、神賀旭との会話が聞こえてきた。

そちらに気を取られていると「…あのー」と小さな声が撫子の耳に入ってきた。

「あら、レインどうしたの？」

声が聞こえてきたのは神賀先生からもらったしゃべるウサギのストラップ、レインだ。普段は滅多に話しかけてこないのにどうしたのだろう。

「今、彼からもらった石なんですがー…」

「ごめん、レイン！また後でね！」

隣の席の子におかしな顔をされ、撫子はレインを机の奥へと突っ込んだ。途中とレインのせっぱ詰まった声が聞こえてきたが無視をした。

休み時間に「レインが何を言いたかったの聞かないと…」と思いながらも撫子はレインを机の奥に入れたことをすっかり忘れて一日の授業を過ごしてしまった。結局、レインの事を思い出したのは全ての授業が終わって、談話室へ向かおうと思って荷物をまとめている時だった。鷹斗も理一郎も先に行ってしまったらしく、今は撫子

一人だ。

机からようやく出してもらえたレインは何かぶつぶつと文句を言っていたが、伝えたい事の方が重要だったのか撫子は必要以上に文句を言われることはなかった。

「あのー、先ほど時田くん？彼からもらった石ありますよねー？」

「ええ、ここにあるわ」

小さく輝く石を指先でつまんでレインに見せる。

「実はですねー。それ、神賀さんのものなんですよー。だから、申し訳ないんですけどー神賀さんに返してもらえますかー」

「ええっそうなの！？」

「そうなんですよー。僕にもどうしてそれがここにあるのか全く持ってわからないんですけどねー」

「そうなのね…。終夜には悪いけど、返しに行きましょうか。先生、まだ職員室にいるかしら…？」

今日は課題の日だった。でも談話室にいるみんなには悪いが、職員室に寄り道しよう。そう思って撫子は立ち上がると、先ほどの石が撫子の手から転げ落ちた。

「あ…」

綺麗だからきつと高価なものだろうと思って壊れてないか心配になり、急いで拾おうとしたときに突如、白い光が撫子を包んだ。

「え…っ！？」

視界がぐにやりと歪む。どこかで体験したことのあるような、それでいて少し違うような感覚。

「きゃあああっ！」

撫子の叫び声は途中で途切れた。なぜなら、彼女の体はその光に飲み込まれ姿を消してしまったのだから。

第一幕「日常が変わる日」(後書き)

どちらも大好きすぎて、暴走した結果。

先生、反省はしているけど後悔はしていませんよ(キリッ)。

第二幕「目を開けば、幕末」（前書き）

CLOCK ZEROのネタバレを盛大に含んでおります。

第二幕「目を開けば、幕末」

「う…うつん…」

心地よい小鳥のさえずりが聞こえてくる。

…綺麗な音。

あまりにも心地が良くて、そのまま身を任せてしまおうとしたが無骨なドタドタドタという音が聞こえてきて目を開けずにはいられなくなる。

「もっ…うるさいなあ…」

どうやら自分はうつぶせで眠っているようで、顔を少し上げて起きあがった。そこでの風景を見て撫子は心臓がひっくり返るんじゃないかと思うぐらいびっくりした。

「っ…どこ、ここ…？」

そこは先ほどまでいた秋霖学園の教室ではなかった。時代劇の映画や教科書で見えるような日本の和室。モノというものはほとんどなく、部屋の片隅に机があつてその上にかろうじて硯や筆などのものや小物が置いてあるだけ。

ふすまから漏れる光が赤いことから、今は夕方なのだと確認することができる。

突然の状況に撫子が啞然としてしていると先ほどのドタドタという足音が聞こえなくなっているのに気がついた。

嫌な予感がする……。

しかし、撫子がその理由に気づいた時には遅かった。

「千鶴ー、美味そうな団子見つけたからこっそり二人で食おうぜー」

「あ……………」

「……………」

入ってきた人物は、驚きのあまり呆然とし手にした団子とお茶を落とし自分の足下に落下させる。湯気が立つお茶が足下にかかった。

「うわっ、熱っ！」

「ええと…」

そこにいたのは撫子よりはずっと年上そうだが、どこか幼い雰囲気が残っている青年だった。長い髪をてっぺんでポニーテールにして、着物を着崩したような格好をしている。

彼は熱さにのたうち回っていたが、すぐに立ち上がって困惑した様子で撫子を見る。

「…お前、誰？八木さんちの子どもの友達？」

彼の問いだけに答えるならばNOと言うべきだろうけど、恐らく彼が聞きたいのはそんなことではないだろう。

こんな所でも泣き叫んだりしない自分の性格はともかわいげがないと思うが、今だけはそんな自分が偉いと思う。

「わ…私は、九楼撫子」

「ふーん…。変な格好してんのな、お前」

「そ…そうかしら？」

あなたの方が変な格好だと思います…という言葉が喉まで出かかったが、飲み込んだ。

「それで、お前何してんの？」

青年は腰をかがめ、撫子の頭をポンポンと軽く叩きながら訪ねる。完璧子ども扱いだ。

…子どもなんだけどね。

「え…ええと。あの私、学校にいて…」

「学校お？」

「気がついたらここにいて…」

しもろどもろで状況を説明しようと、学校名や家の住所などを言

つてみたが青年は難しい顔をして頭をかき始めてしまった。

「よくわかんねーけど、迷子なんだな！」

「そ…そうですね」

青年の迫力に押されてつい肯定してしまった。

「近所の子どもなら総司の方が知ってつかないぞ。日が暮れるから早く帰らないとお前の父さんと母さん心配するしな」

そう言つて彼は撫子の手を引いて部屋から連れ出した。

わあ……。

部屋から出た先にあつたのは、撫子が今までにテレビの中でした見たことがないような『古風な日本の家』の景色だった。

こんなに本格的なのは見たことがない。木で出来た家は少し古い香りがして、塀の近くに植えられた木々はさわさわと風を受けて揺れている。

「あの…すごい家ですね」

「そつかあ？古いのは確かですけどさ」

それ以降は会話が續かなくて、気まづくなり私は押し黙ってしまった。けれども青年は私が迷子になってしまつて不安なのだろうと大丈夫だ、とか元気だぜ、とか明るい言葉をかけてくれた。その彼は優しくて思いやりのある人なのだろうと察することが出来た。

そういえば、と彼は自己紹介をしてくれた。藤堂平助さんと言うらしい。今時珍しい古風な名前だ。

「にしても総司いねーな！。巡察の日じゃねーし…。また仕事サボつて土方さんにちよつかいでもかけてんのかな」

「……………」

大人という存在はそんな事して良いのだろうか…？

初対面の大人にそんな事を言うのは失礼だと百も承知なので、内心で突つ込みを入れることにした。

そんな二人が廊下を歩いていると、庭の方から低い声がかかった。

「平助」

そこにいたのは真っ黒い着物に襟巻きをした青年だった。先ほどまで素振りをしていたのだろうか、木刀をかまえている。うつすらと汗が見えるが、疲れた様子どころか表情すらない。

「あ、一君じゃん。ちょうどいいからさ、総司探すの手伝ってよ」

「総司を？それに、その子どもはどうした」

「なんか迷子みたいでさ。総司なら知ってると思って」

一君と呼ばれた青年が冷たい目で撫子を見下ろした。撫子が何者なのか疑っている目だ。

……怖い。

「平助。たとえ子どもでも屯所に上がり込ませるのは問題だ。長州や薩摩の間者で何かしらの情報を握っていたらどうする。一度、副長に指示を仰ぐべきだ」

「いや、こんなガキまで疑ってどーすんだよ……」

平助はがくんと首を落として全力で脱力した。

「俺は万が一の事を言っているまでだ」

だが、黒い青年は無表情で平助に迫る。

「いや、でもさあ……」

「じゃあ、みんなで飯食つてるときにでも土方さんに会わせればいいんじゃないか？斉藤もピリピリすんじゃないよ」

二人の押し問答を終わらせたのは首が痛くなるほど背が高い男の人だった。

「原田か」

「佐之さん」

口々にその人の名前を呼ぶ。

彼はかがんで大きい手で撫子の頭を撫でる。子ども扱いされていると思うと少しむっとしたが、不思議とその手はとても安心した。

……お父様みたい。

「すまねえな、嬢ちゃん。野暮なヤツらばっかで」

「だ……大丈夫です」

「俺は原田佐之助っつーんだ。嬢ちゃん、名前は？」

「九楼撫子…です」

「撫子ちゃんか。新撰組の屯所だっってわかって入ったのかはわからないが、どこから入って来たんだ？」

「しんせん…ぐみ？」

そこでようやく撫子は違和感に気がついた。

新撰組。

歴史の授業で勉強したことがある。それは、幕末にいた警察みたいなことをしていた人たちで…。

『そうみたいですな』

「レインっ！？」

ポケットからレインの声が聞こえてきた。ようやく知っている存在に出会えて撫子は少し涙が出そうになる。

レインを出してあげると「あー、苦しかったですねー」といつもののんきな声が聞こえてきた。

「な…なんだよ、それ、カラクリか？」

最初に口を開いたのは平助だった。

「あ…」

しまった。いつもレインは空気を読んでくれるから忘れていたけれど、普通の人から見たら驚くのは当たり前だ。

「ええと、ですね。レインはこんなに人間っぽくしゃべるけどAIなの。私の友達なんです」

そうは言ったものの、信じられない様子で三人はレインに注目している。

一番最初に動いたのは斉藤だった。右腰に差してある刀の柄に手を添えて

「もしか、薩長の新手の兵器か」

『って、僕をにらみ続けたまま刀を抜こうとするのやめてくださいっー』

「きゃーっ！レインっ！！」

どうにかこうにかとにかくしゃべるが安全なのだと言得するのに
時間がかかり、もう少しの所でレインが切り刻まれそうになって大
変な目にあつたのは言うまでもない。

第二幕「目を開けば、幕末」（後書き）

撫子の口調がですますとタメ口と入り乱れているのは気にしない！

第三幕「新撰組副長登場」(前書き)

CLOCK ZEROのネタバレを盛大にしております。ご注意ください。

第三幕「新撰組副長登場」

「で、お前らは別の世界から来た…だと？」

そう言ったのはとても顔が整っているが、怖そうな男の人だった。結局撫子は新撰組の中でも偉い人たちに会うことになってしまった。

新撰組：日本史を勉強する上で誰もが聞いたことのある名前だ。

その副長が土方歳三。その名前ぐらいは撫子だって知っている。ここへ来る途中にレインが言っていたが、私たちは全く別の世界から来ていて、未来から来たなんて言ってしまった方がいいらしい。自分達の歴史の先を知ったら、未来改变につながる可能性があるから…とか。

『はいー。そうなんですよねー。困りましたよねー』

「それで、代わりに雪村君が君たちの世界に行ってしまった…と」
今度は大きな眼鏡をかけている優しそうな男性が言葉を続ける。

彼は新撰組総長を務める山南敬助。

『はいー』

そう。なんと異常な事態に合っているのは撫子だけではなかったという。レインによると、本来ここにいたという『雪村千鶴』という女性が撫子のいた世界へと撫子と入れ替わりで行ってしまったらしい。

「うーむ…それは、大変だ。雪村君も心配だが…君のような幼い子どもがそんな目に…」

そう言っとうっすら涙さえ浮かべているのが、この新撰組の中で一番偉い人。近藤勇。

とても人が良さそうである。

「副長。そいつの言うことは信用できません。何故そのようなことがわかるのかも疑問です」

「けどさあ…そいつ、千鶴に会ってないのに千鶴の事知ってたし嘘

つつーには現実味がなさすぎじゃね？」

平助と斉藤がそれぞれに意見を述べる。

「まあ、僕としてはいてもいなくても同じみたいなあの子がいなくなってくれて別にかまわないんだけどね」

そう飄々と笑って言ったのは一番隊隊長沖田総司。先ほどまで平助と探していた相手。ニコニコと笑ってはいるが、言っていることはとても辛辣で恐ろしい。

ちなみに…探していた彼はどこへ行っていたのかと言うと、平助の言う通り近所の子ども達と遊んでいたそう。句集を読みながらそれを知ったときの皆の顔が蒼白になった理由は撫子にはよくわからなかった。

「おいおい…問題あるだろ。屯所から出せないのに、いなくなってるってこと自体問題大ありだ」

原田の言葉から推測するにどうやらその『雪村千鶴』はこの屯所から出てはいけない存在らしい。

「とりあえず。この子の事はとにかく、千鶴ちゃんは探さないといけねえだろ」

本当にただ脱走していたんなら、殺さねえといけねえし…。そう言ったのは新撰組二番隊隊長永倉新八。

殺す…？

不吉な単語を聞いてしまつて身を強ばらせる。

「あいつはそんな事するヤツじゃねーよ！」

「でもどうかな？あの子、本当は抜け出す機会を探してたのかもよ？」

「総司…っ」

平助と沖田はその場でもめ始めるが、撫子はそんなことを気にしている余裕もなかった。

私、もしかしたらここで殺されちゃうの…？

『そうですねー。そんなに信じられないなら、その『雪村』って人と少し話してみますかー？』

「えっ…レイン、そんなことも出来るの？」

『はいー。少しだけなら、カエルくんを通して話すことが出来るんですよー。隠された新機能ですー』

「そ…そうなのね」

何か釈然としないが、彼らをなんとか信じさせたくて藁にもすが
る思いだった。

「じゃあ、お願いするわ」

『はいー。少し待っててくださいねー』

そこからレインは黙ってしまった。不安になり撫子は声をかける。

「レイン…大丈夫？」

しかし、そこから聞こえたのはレインの声ではなかった。

『撫子？大丈夫っ！？』

『おい、大丈夫かつ！？』

「鷹斗に…理一郎っ！」

鷹斗に理一郎の声がレインから聞こえてきた。知った二人の声を
聞いて涙が出そうになる。

レインを握りしめて二人に何か言おうとしたが、レインをひよい
と誰かに奪われてしまった。土方だ。

「おい、千鶴。いるか？返事をしろ」

『はい、土方さん…っ』

撫子から聞いた知らない女性の声だったが、その声の主はその
場にいた全員が知っているようではっきりとした雰囲気伝わってきた。
そして女性の方も、知っている声をきいたおかげか安心したよう
な様子だ。

『私にもよくわからないんですけど、このカラクリでお話が出る
んですね』

「今、話を聞いたがこいつらの言うことは本当か？」

彼女の言葉を無視して聞きたい事だけを訪ねる。少し冷たいよう
な気もするが、彼女は気にした様子もなくその質問に答えた。

『…そうみたいです。私も気がついたらここにいましたし』

「そうか」

そう言うなり、興味がなさそうにレインを撫子へと放り投げた。

「ちょ…っ！」

彼女の立場は全くわからないが、少し冷たすぎではないだろうか。そう思っただけ抗議の声を上げようとしたが、鷹斗と理一郎の言葉に遮られる。

『俺、そういうの研究してるから…なんとしてでも君を連れ戻すから、待ってて！』

『他のヤツらも心配してる。待ってる』

その後ろから『撫子ちゃんがんばー。ほら、円も応援して！』
『央が応援しろと言うので、不本意ですがぼくも応援させていただきます。頑張ってください撫子さん』
『ふむ…皆で応援しておるのだな。これが、こうしえんやきゅうじょうでよく見るせいしゅんのおもいでの一ページか…』
『てか、お前らよく平気で信じてるな。めんどくせーからそろそろ俺、帰っていいか？』
『などなど、知った声が聞こえてくる。』

「みんな…っ」

何か言おうと、唇を震わせたがそこで通信は途絶えてしまったようでもいつも通りのレインの声が聞こえてきた。

『あー、はいはい。どうやら限界みたいですねー。それで、信じてもらえましたかー？』

「まあな」

土方さんが代表して答えた。

「とは言っても、どうすりゃあ千鶴とお嬢ちゃんを元通りにできるんだ？」

『それはですねー。彼女のいた世界で慌てて頑張っている人がいるので、そのうちなんとかなると思いますよー』

「それ、たぶん種悪の元凶が何か間違っちゃって慌てているって意味にとれるよね。あははっ迷惑な人だなあ」

「総司。笑い事ではないだろう」

困った様子には見えないんですけど…。撫子は心の中で密かに突っ込んだ。

「と…いうことはあの…レイン？」

「あー、はいはい。なんですかー？」

「私、その誰かがなんとかしてくれないかぎりはこちらにいないくちやいけないってこと…？」

「そういうことになりますねー。まあ、あなたなら大丈夫ですよー」
人ごとのようにレインが言う。…実際、人ごとのだが。

「でも、それならこの子をここに置いておく理由にはならないよね。さつさと放りだして千鶴ちゃん帰ってくるの待った方が良くないんじゃないかな？」

「そんな…」

沖田のその言葉に撫子は悲鳴のような声を上げる。こんなよくわからない場所に放り出されるなんて、冗談じゃない。

しかしその不安はレインが解消してくれた。

「あー、それはですねーしない方が良いと思いますよー」

「へえ…どうして？」

「その千鶴って子をそっちに転送する時に基準となるのは撫子くんだからですよー。つまり、目印みたいなものですねー。」

いざ転送した先がここの外だったら、あなた達だって何か困る理由があるんですよー」

「へえ…ただのおバカなお人形じゃないんだね、君」

「いえいえー。僕はしがないただのウサギさんですよー」

沖田とレインからどす黒い何かのオーラを感じる…。レインにオーラがあるのか疑問だが。

その会話をうち切ったのは土方だった。あぐらをかいて座っていたが、立ち上がり部屋から出て行こうとする時に。

「とにかく、そいつはあいつが戻るまで新撰組預かりとする。てめえら、そいつから目え離すんじゃないぞ！」

そう言って、出て行ってしまった。

「まったく…土方さん、監視するの俺らじゃん…」

平助が頬を膨らませて眉を潜めた。どうやら、面倒くさいことを押しつけられて不満があるのだろう。

「タダ飯ぐらいが減らないのって困るよね」

「おいおい…総司。千鶴ちゃんだって毎日一生懸命頑張ってるだろうが」

「副長の命令ならばいたしかたあるまい」

その様子を見ていた撫子はそっとレインに話しかけた。

「ねえ、レイン…」

『はいはい。なんですカー？』

「一応、かばってくれたのよね。ありがとう」

『……………いえいえ、いいんですよー。僕も、君を元の世界に帰さないと怒られちゃいますしねー』

「怖そうな人たちだけど、知らない所に放りだされるよりはマシね」
『そうですねー』

「というか君達さ、自分が今どういう状況なのかわかってる？」

「！？」

撫子とレインの間に大きな影が迫り、撫子の手にあったレインが奪い取られてしまった。レインの紐を持ってプラプラと揺らしているのは沖田だ。

「ちょ…何するんですか？」。

大人と子どもという身長差や沖田が特別背が高いということもあり、撫子から見た沖田は迫力満載だ。しかし、ここで負けるかとふるえる拳を握りしめ撫子は冷静を装って睨みつける。

「ん？別に。だって、君のものを僕が取っちゃいけないって決まってるじゃないしょ？」

撫子は精一杯レインを取り戻そうとするが、自分より高いところに掲げられて手が届かない。

「それに、君はあの子が戻るまでは安全だって勘違いしているみたいだけど…。あの子だって別にいなくて良い存在なんだから、君の

身の安全が保障されている訳じゃないんだからね？」

「……………っ！！」

寒気が、悪寒が撫子の背中を撫でる。まるで、咽に刃物を突きつけられているような感覚。

「だから、君はここで別に死んでも……………」

「じゃあ、私はここから逃げるわ。死にたくないもの」

恐怖に耐え、震える声を悟られないように撫子は声を張り上げる。怖くて怖くて泣き出しそうだったが、目に溜まりそうになる涙をグツと押さえつけ沖田を睨みつけた。

撫子のその態度に驚いたのか、一瞬沖田は目を開いたがすぐに面白そうに口のはしを浮かべて笑みを作る。

「へえ…逃げられると思うの？」

「やってみないとわからないわ」

数秒、二人は黙ってお互いの瞳を見ていたがいきなり沖田はレインを撫子に返した。

「ど…どういうこと？」

「ちよつとからかおうと思ったんだけど、君が思ったより真面目に言うものだから飽きちゃった」

「な…っ！」

そう言つて沖田は背中を向けて歩き出してしまふ。ちなみに…と、沖田は言葉を続けた。

「君が役立たずだつて証明したくないなら、あの子の部屋にある僕の破れた隊服直してくれないかな？女の子なんだから、それぐらい出来るでしょ？」

みるみるうちに頭に血が上る。男女差別だ、なんて思ったがそこは売り言葉に買い言葉でつい「やってやるわよ！」と撫子は返してしまつた。

その様子を見て平助と原田、斉藤が気の毒そうな表情を浮かべる。「そーいや総司、あいつに破れた隊服直してもらうんだーって言うてたな。んなの自分でやればいいのに、なんであいつに押しつける

んだよ……」

「まあ、あいつの繕い物って丁寧だからやってもらいたい気持ちはわかるっちゃーわかるけどな」

「それを見ず知らずの子どもに押しつける総司もなー……」

「大方、明日の巡察に使うのに出来ていないと思って腹が立ったのだろう」

『というか、僕としてはあの子が繕い物なんて出来るのが心配なんですけどねー』

さりげなく、レインも会話に混じって撫子の身の不幸を共感し合った。

第三幕「新撰組副長登場」(後書き)

売り言葉に買い言葉。

撫子は千鶴と違って、素直じゃないから新撰組メンバーとの関わり
合い合い方を考えるのは楽しいです。

第四幕「破れた服を直すのは技術がいる」(前書き)

これにはCLOCK ZEROのネタバレが含まれている可能性があります。ご注意ください。

第四幕「破れた服を直すのは技術がいる」

「そういえば私、縫い物なんてしたことがなかったわ…」

撫子が最初に倒れていた部屋…つまり、『雪村千鶴』の自室に戻った撫子は沖田の隊服を見つけ、早速繕い物をしようとした時にポツリと呟いた。

撫子は良い家の出身で家の中で縫い物をしたことはない。厳密に言えば、学校の授業などで縫い物をしたことはある。だが、それも巾着とかエプロンなどの簡単なものであり、しかもミシンという便利な機械を使っていたので針に糸を通すことなんてほとんどないまま育ってきたのだ。できないのは当たり前といえば当たり前だ。

今はこの場にレインはいない。土方に話があると言って、別の隊士に連れられてしまったので今は撫子一人だ。

「うつ…でも、言ったからにはやらないと…」

沖田にやっぱり役立たず、なんて言われるのは悔しい。悔しいから、なんとしてでもやりたい。

でも……。

「あ……」

手元の隊服にしずくのようなものが落ちた。

なんだろう、と思ってそれが自分の涙だとわかるのに少し時間がかかってしまった。

突然こんな場所に来てしまって、殺されそうになって…怖くないはずはなかった。一人になったことで、緊張の糸が切れてしまったのだ。

「うつ…鷹斗…理一郎…お父様、お母様…」

一度涙がこぼれるともう止まらない。ポロポロと涙は止めどなく溢れ嗚咽が咽の奥から出てくる。

しばらく一人で泣いていると、ふすまの向こうから声がした「…

おい、邪魔するぞ」

「…!？」

そこには、レインを手にした土方さんが立っていた。涙を拭っている暇もなく、泣き顔をそのまま見せてしまう形になる。

土方さんはバツの悪い顔をしたが、ドスドスと部屋の中へ入って来る。

「あの…」

「それ、総司のか」

「あ…はい」

「あいつにも困ったもんだな。てめえの分ぐらいてめえでしろってんだ。俺が総司に返しに行つてやる」

そう言つて撫子の手から沖田の隊服を奪い取るうとするが、撫子は強くつかんでそれを静止した。

「そ…それは駄目です」

「あ？」

ギラリと睨まれて正直怖かったが、撫子は首を横に振る。

「それは…私がやるって言つたんです。だから、言つたからにはやらないと…」

「さっきまで繕い物でめそめそ泣いてやがったのはどこのどいつだ？」

「う………」

図星を付かれて押し黙つてしまう。

土方さんはふー、と思いたため息をした後「貸せ」

「え…？」

「それと針と糸だ。繕い物すんのに、そんなのもねえのか」

「は…はい！」

土方さんは乱暴に針と糸を取り出し、乱暴に縫い始める。が…。意外と丁寧かも…。

その手つきも態度も乱暴だが、上手に丁寧に縫っていく彼に感心

する。

目線を繕い物へと向けながら土方は口を開く

「…おめえはガキだし、突然知らねえ土地に来ちまって不安にならねえ方がおかしいんだ。お前を外へ連れ出す訳にはいかねえし、特別な便宜を図る訳にはいかねえが…話ぐらいは聞いてやる」

「…ありがとうございます」

神賀先生みたいに全体的にすごく優しい訳じゃない。だけど、怖そうに見えて実は優しい人なのかもしれない。

「総司は人をよくからかうし、困ったヤツだが悪いヤツじゃねえ。

他の連中も問題ばかり起こすが、腕は立つし信用できる」

「そうなんですか…」

「…あいつも、新撰組の一員じゃあねえが信用に足る人物だしな」
「え…？」

ポツリと土方が漏らした言葉。誰の事を指しているのか撫子にはわからなかったが、だ彼の表情は、とても優しくてその人はとてもこの人に信頼されているのだろうと感じ取れた。

「なんでもねえ。できたぞ、ホラ。もう面倒かけんじゃねえ」

「あ…ありがとうございます」

乱暴に隊服を撫子に放り投げると「じゃあな」と言って土方は行ってしまった。

「土方さんってなんだかんだ言つて、女の子に優しいもんない」

「と…藤堂さんっ」

土方と入れ違いになるように部屋に入ってきたのは膳を持った平助だ。

「飯。持ってきてやったぞ。腹、減ったろ？」

膳を置いて、撫子の頭をぐりぐりなでて笑う。どうしてこの人たちはとぐりぐり人の頭を撫でるのだろうか。子ども扱いされているのが丸わかりで、むくれてしまう。

「お…お腹なんて減っていませんっ」

それでついつい意地を張ってしまうのだが…。

ぐう。

盛大に腹の音を響かせる。テレビなどの雑音もなく、静かな部屋なので一層音は響いた。

「う……」

「お前、子どものくせに可愛げねえな！。腹の方は正直みただけど」

「し……しょうがないじゃない。晩ご飯食べてないんだから……」

これ以上意地を張っていても仕方ないか……と思い、運んでもらった膳の上の箸を手にとって食べ始める。

平助は壁にもたれかかり、あぐらをかいてその様子を眺めていた。部屋を出ていく様子はない。

「そ……それで、いつまでここにいますか……？」

撫子はおそろおそろ聞く。すると、平助は少し面倒くさそうに

「だつてさ、その膳持つて帰るの俺だしさ。今の時間のお前の見張りは俺なんだよ。ただ見張つててもつまんねーから、いても別に良いだろ？」

明るい彼なら気まずい雰囲気になることは少ないとは思うが、そもそも人とのコミュニケーションというものが大の苦手な撫子にとつてはありがた迷惑な話だった。

……しょうがないわよね。

そう思つて膳の上に乗っている夕飯に目を向けた。

白いご飯に鮭の切り身。ほうれん草のお浸しに山菜のおみそ汁。

それと、おつけ物にお豆腐。

こんな模擬的な日本料理を食べたことないかもしれないわね……。

そう思つて一つ、ほうれん草のお浸しを口に運ぶ。

……美味しい。

「ん、うまいか？」

いつの間にか近づいて来ていた平助が撫子の顔を覗き込む。正直に美味しいっていうとなんだか悔しくて、つい憎まれ口を叩いてしまった。

「お…美味しくはないわ」

それを聞いて平助は呆れたように頭をがりがりとかいた。

「あいつは正直なのに、同じ女でも全然違うのな。っていうか、あいつ大丈夫なのかな…」

余計なお世話よ、と思いながらも撫子はふと『あいつ』と彼が呼ぶ時、なんだか優しい音がした気がした。それでつい思ったことを素直に口に出してしまった。

「あの…もしかして、藤堂さんは千鶴って人の事…」

「なっ…!!」

そこまで言う和平助は顔を真っ赤に…というか、耳まで茹でタコのような色になる。

明らかに動揺した様子の平助は「そそそそそんな訳ねえだろ！ バッカじゃねえの！なんで俺があいつの事、すすすす好きだなんてなないだろ！」とろれつの回らない声で必死に弁解する。

「あの…私、『好きなのかしら？』なんてまだ一言も…」

「……………っ!!」

さらに墓穴を掘ってしまった平助は「おおおお俺は違うからな！違うからな！」と言って部屋を飛び出してしまった。明らかに逃げた。

『あらー。逃げちゃいましたねー』

レインがのんびりとした声を上げた。

第四幕「破れた服を直すのは技術がいる」(後書き)

私の中のへーすけは恋する健全青春男児。成人してても男児。

第五幕「現代っ子はできないことが多い」(前書き)

ネタバレあったりなかったり。

第五幕「現代っ子はできないことが多い」

すぐに遠くから「平助っ！」と土方さんの怒鳴り声が聞こえてきた。

『ひょっとして、あなたの見張りのはずなのに行っちゃったから怒られたんですかねー』

はははー、と笑いながらレインは撫子に語りかけた。

「そ…それって、笑い事じゃないわよ。レイン…」

怖かったが、箸を置いて廊下の様子を伺う。そうすると、土方さんに大声で怒られている平助の姿が見えた。

「ど…どうしようかしら。一応、私のせい…なのよね」

『放っておけば良いじゃないですかー』

「そういうわけにもいかないわよ」

『ははあ…お人好しですねー、あなたは』

この状況に罪悪感を抱かない方が人間としてどうなんだろう、とも思うがそもそもレインはAIなのだ。人間ではない。そう思っ小さくため息をついた。

『でも、ここから出たらまた彼が怒られてしまっんじゃないですかー』

「それもそうよね…」

襖を覗きながら頭を抱えていると後ろから突然声をかけられた。

「おい、嬢ちゃんどうしたんだ？こんな所で」

「あ…原田さん」

稽古帰りだろう。布で汗を拭きながらやってきたのは原田だった。

「あの…藤堂さんが私のせいで怒られているんです」

「ははー…それはまたなんでだ？」

当然のように言われて撫子は口ごもった。いくら人ごととはいえ、正直に『千鶴さんのことが好きなんですか？』と聞いたら走って行

ってしまったなんて言えない。

『それはですねー。彼女が藤堂さんの好きな女の子を言い当ててしまったからですよー』

撫子のそんな心境を裏切ってレインが声を上げた。「ちょ…レインっ！」慌てて口を押さえるが（そもそもレインには口はないから無駄な努力だけど）、遅かった。

しかし原田は特に驚いた様子もなく「なるほどな」と短く言って「ほっとけほっとけ」ニヤリと笑った。

「その間、嬢ちゃんの面倒は俺が見てやるからよ。ほら、まだ飯の途中なんだろ？食べよ」

「ちょ…あの…えっ」

押し切られ、部屋の中に戻ることになってしまった。未だに廊下には土方さんのお説教は続いている。耳を傾けるといつのまにか日頃の生活態度についても注意されている。

「神賀先生とはえらい違いだわ…」

思わず独り言を漏らす。原田はそれに反応して「その神賀先生つつーのは誰だ？」

「私の通っているクラスの先生よ」

その言葉に原田は眉を寄せて「くらす…つつーのはよくわからんが、つまり学習院みたいなとこだな。嬢ちゃん、育ちが良さそうだし良い家の出身なんだなあ」

撫子は有名な九楼財閥の令嬢だ。間違っではない。

「で、嬢ちゃんの通っているその学習院には友達とかいんのか？」

友達。そう聞かれて撫子は真っ先に課題メンバーのことを思いだした。

明るいが、空気が読めなさすぎる共に、中央至上主義で少し毒舌な円殿様口調でいつもぼーとしている終夜に、典型的な問題児だけど実は面倒見の良いトラ。そして、不愛想でいつも喧嘩ばかりするけどなんだかんだで心配性の理一郎に、頭は良いしいつも笑っている話してとても楽しい鷹斗。彼らのことを考えたら思わず少し笑って

しまった。

「ええいるわ。個性豊かすぎるのがたまに傷だけど」

「へえ。嬢ちゃんも良い仲間を持ったんだな」

わしゃわしゃと原田は撫子の頭を撫でた。

「そうだ。それ食ったら、ちよつくら稽古でも見にいかねえか？他の隊士らはいないし、幹部ばつだからよ。土方さんには俺から話通しておくから。他にすることもねえんだろ？」

「あ…はい」

稽古を見て何をすれば良いんだろうと心の中で思いながらも、せっかく気を遣ってくれた原田の心遣いが嬉しくて頷いた。

「じゃあ、食い終わる頃見計らって迎えに行くから。それに、その変な服もどうにかしねえとな」

「へ…変な服って…」

私のいた世界ではこれが普通なんですけど、と言いたかったが和服が標準のこの世界…というか、この国では撫子の服は変意外の何者でもないのだろう。

原田はそういつて、未だに怒鳴り続けている土方さんの方へ行ってしまった。結果的に平助は土方さんのお説教から解放されることになり、ホッとした様子で撫子のいる部屋へと戻ってきた。

「あー…オレ、かつこわりい…」

男としてのプライドが傷ついたらしく、平助は今度こそ障子の向こうで黙って座り込んでいた。

その間に撫子のご飯を食べ、原田がやってくるのを待った。平助に食べ終わったと伝えたときにちょうど原田はやってきた。ナイスタイミングだ。

「嬢ちゃん、八木さんの奥さんが着物貸してくれたぜ。ホラよ」

かなり年季が入っているが、それなりに綺麗な状態の着物を手渡された。桜色の生地、白い模様が入っている。

それを見た平助が少し驚いた様子で言った。

「八木さんちつて、勇坊しかいねーはずじゃん。なんでそんな女物

の着物持ってたんだよ」

「ん、それはこれが八木さんの奥さんの昔使っていた着物だからだ。『女の子がいるんだが、貸しちゃくれねえか』って言ったら快く『もう使わないから』ってくれたんだよ」

「へー、綺麗な着物じゃん。良かったな」

平助はマジマジと着物を見てそう言った。

「じゃあ、俺は先に行ってくつからよ。着替え終わったら、平助と一緒に来な」

ヒラヒラと手を振って原田は行ってしまった。

「あ…はい」

じゃあすぐ着替えよう。そう思って撫子は着物を見下ろした。

「……………」

何が重要なことを言い忘れている気がする。嫌な予感がした。

着物を見たまま立ち止まっている撫子の様子の変だと感じ、平助は声をかける。

「おい、どうしたんだよ。着替えないのか？」

そう言っただけ撫子の顔を覗き込む。なんだか体全体がプルプル震えているのは気のせいだろうか。

「おい」

手を撫子の目の前でブンブン振ってみても、反応がない。

しばやくやっているよ………ない………よ」小さな声が聞こえてきた。

「あ？でけえ声じゃないと聞こえないって」

若干の苛立ちを覚えて再度聞くと「き…れない…のよ」「は？」

「だから…着物なんて、着たことないから…一人じゃ出来ない…のよ！」

大声を上げて顔を真っ赤にした撫子が言った。

「おやおやー、困りましたねー。まあ、現代っ子はそうでしょうねー」

レインがのんびりと言った。

第五幕「現代っ子はできないことが多い」(後書き)

平助と原田さん。

本当に、現実的に考えると着物なんて現代っ子は着れないと思う。

第六幕「撫子の剣術稽古」(前書き)

ネタバレを含む可能性がございます。

第六幕「撫子の剣術稽古」

自分がとても情けない。

平助に呆れられながら着物を着せてもらっている自分がとても情けない。

…だって、しょうがないじゃない。理一郎みたいに茶道やってる訳でもないし、今時の日本で和服を着る機会なんて全くと言っていいほどないんだから…っ！

顔を真っ赤にし、あまつさえちよつとだけ涙が浮かんでいる撫子。まがりなりにも女の子なのに、呆れた様子があってもとくに女の子の着替えを手伝う時恥ずかしいとかいう気持ちなんて全くなさそうな平助の態度にも涙が出そうになる。

「お前さー…一体どこのお嬢様なんだよ。俺は小姓でもなんでもないつつの」

帯をしめている途中、平助が言った。

「そ…それは、ごめんなさい。でも…やったことがないんだから仕方がないじゃない」

つい言い訳をしてしまう。いや、れっきとした理由だ。無理矢理自分を納得させる。

（まー、本当にお嬢様なんですけどねー）

レインがその様子をなま暖かい目で見ながら思う。

「ほら、できたぜ」

「あ…ありがとう」

ポン、と帯を軽く叩いて平助は立ち上がった。

「じゃ、行こーぜ。左之さん達待つてるだろーし」

「あ…はいっ」

急いで、撫子は平助の後を追った。

屯所の近くにある壬生寺で、彼らは稽古をしていた。そこにいた

のは、沖田・斉藤・原田の三人。沖田と原田の二人は打ち合っており、竹刀とはいえ激しい音を響かせていた。

「お前達か」

「よ、一くん！」

こちらに気づいた斉藤が声をかけてきた。平助はかるく返事を返す。

「こ、こんばんは」

「ああ」

人なつこい平助や面倒見の良い原田とばかり話していたせいか、斉藤の返答に少し寂しいものを感じてしまう。

無愛想で右に出るものがないのは理一郎だけど、それとはちょっと違うのよね。

そう思って、マジマジと斉藤を見る。その視線に気づいたのか。

「何を见ている」

睨まれてしまった。少し怖い。

「あー、一くん！こいつ怖がってるじゃん！んなこえー顔すんなって！」

平助が撫子を庇う。というより、なんだかからかっているように見えるのは気のせいだろうか。

平助の言葉を聞いて、斉藤は押し黙る。

「え、怒っちゃった……!？」

胸がヒヤツとする。不安になっていると。

「おい、おまえ」

「は……はいっ」

声が裏返ってしまった。

「俺は、刀のことかしらぬ。だから、女子どもの扱いなど皆目見当もつかない」

「……………」

「だが、お前に剣術なら教えることができる。おまえは女子で、子どもだが……多少の護身術ぐらいは身につけておいて損はないと思う

のだが」

「は…はあ」

つまり…稽古をつけてくれる、ということなのだろうか。

「そ…それじゃあ、ありがたく…お願いします」

撫子はぺこりと頭を下ろした。着慣れない着物で歩幅さえ満足に出せない状況だが、好意は素直に受け取っておくべきだろう。そう思っていると、後ろから声がかかった。

「ていうか、一くんさ。女の子に剣術ってどうかと思うよ？」

沖田だ。原田との打ち合いが終わったようで、布で汗をふき取りながらこっちに向かってそう言った。後ろにいる原田は地面に尻をついて、休んでいる。相当疲れている様子だ。

「む…では、どうすれと…」

なんだか狼狽えている斉藤が沖田にそう言っていると、沖田の返事が返される前に「お、総司！今度俺とやるーぜ！」「ん…？まあ、いいけど」「よし、じゃあかかってきやがれ！」「はいはい」と言つて、二人で勝手に稽古を初めてしまった。

「……………」

「……………」

なんだか稽古を行うタイミングさえ見逃して、撫子と斉藤は微妙な雰囲気のまま沈黙してしまった。

「ええと…、やりましようか…？」

しびれを切らして撫子がそう言つと「う…うむ。おまえには、軽い棒の方が良いだろう。探してくる」と、まだぎこちないカンジで斉藤が稽古道具を取りに行った。

少し経って、子どもの撫子でも持てそうな木の棒が斉藤の左手に握られていた。掴みやすくしてくれたのか、握る部分には軽く布がまかさっている。

「では、始めるぞ」

「…はい」

撫子が子どもということもあり、斉藤の稽古は他の隊士の稽古に

比べてものすごく優しかった。とは言っても、普段からこういう人種に関わりのない撫子にとっては若干厳しいようにも思えてしまったのは仕方がないことだろう。

「今日はここまでだ。先ほどやった基本は忘れるな」

思ったより撫子の上達が早いのを気に入ったのか、始めたときより幾分やわらかい顔で斉藤はそう言っただけで離れていった。

「あ……ありがとうございます」

「では俺はそろそろ部屋へ戻ることにする。お前も来い。一人で戻らせるわけにはいかない」

斉藤はそう言っただけで、撫子を置いてスタスタと歩いて行ってしまった。慌てて撫子はその背中を追いかける。

部屋まで送ってもらい、斉藤と別れた。去り際に「布団は押入の中にあるはずだ」と言い残される。

「教えてくれるなら、出してくれてもらっても良いのに……と考えるのは厚かましすぎるわよね」

よいしょよいしょと、押入の上段にある布団を取り出しながらそう言った。

「まあ、そうですねー。でも、それ以外の理由もあるんじゃないですかー？」

「それ以外？」

「ほらー、一応ここ、女の子のお部屋でしょー？まがりなりにも女の子の部屋を、勝手に荒らすのって嫌じゃないんでしょうかねー」

「……そう言われてみれば、そうね」

布団を敷いて、とりあえずその上にぼふつと座る。

ふわりと、知らない人の匂いがした。どこか桜の香りにも似ているな、とぼんやり考える。

ふと、あることに気づいた。

「ねえ、レイン」

「はいはいー、なんですかー？」

いつも通り軽い調子のレインの返事に、撫子は慎重に言葉を選び

ながら訪ねる。

「あのね…思ったんだけど、ここって幕末の新撰組の時代…なのよね？」

「そうなりますねー。まあ、ここの人たちは幕末だって知りませんけどねー」

「それで、私と入れ替わりになった雪村千鶴って人は、女の人。でもここにあるのは、みんな男性用の袴だわ」

「そうですねー」

「彼女は、男装してたってことだわ。そして、この新撰組に軟禁されていた。原田さんが、ここから出せないって、言ってたもの。そして、もし脱走なんてしたら彼女は殺されないといけない…。関わらせる人数を制限するほど、重大な秘密を握っている立場にいるってことだわ」

「ほうほうー」

妙に感心したような声をレインが上げる。

「一体、何をあの人は隠しているのかしら…」

答えの出ない疑問に頭を悩ませる。

うーん、とうなっているとレインがのんびりと言う。

「まあ、それはあなたが考えても仕方のないことですよねー。それに、下手に秘密を知ってしまったらどうなるかわかりませんよー？」

そして一層低い声で。

「ここは人切り集団、新撰組なんですから」

背筋に何か冷たいものが走り、ごくり、と撫子はツバを飲み込んだ。

第六幕「撫子の剣術稽古」(後書き)

いささか女性用の着物で剣術は無理だとは思ってたけど、無視！

第七幕「夢の姿」(前書き)

ネタバレを含む可能性があります。特に今回。

第七幕「夢の姿」

夢を見た。

それは、いつも見る妙に現実味のある、壊れた世界の夢。

私は、その世界を歩いていた。

なんとなく歩いて行くと、『彼』がいる居住区へとたどり着いていた。

『彼』は今日もいて、いつもどこか寂しい目で私と会話をする。

「…こんにちは」

私があいさつをすると、ぶっきらぼうに「ああ」という返事が返ってくる。

私は座り込んでいる彼の隣に座った。

何を話して良いのかわからず、お互いしばらく沈黙していると、突然『彼』は声を上げた。

「おい、お前：光っていないか？」

「え？」

言われてみると、たしかに自分の全身から淡い光が発せられている。

「…確かに、そうね」

いつのまにこんなエコな身体になってしまったのだろうと、間の抜けたことを考えてしまった。

「お前、案外冷静だな…」

「だって、騒いだって仕方がないじゃない」

「そっくりだ」

『彼』はどこか呆れたように笑う。誰が誰とそっくりなのよ、と言おうとしたが、その前にその笑顔にどこか見覚えがあつて、考えてしまった。だが、思い出すことはできない。

というか、別の世界に飛ばされていてもこの夢は見るのね…と少し残念な気持ちになった。

「って…お前…っ！その姿…っ」

「え？」

『彼』が声を上げた。先ほどとは違う、より驚いた声だった。

私は自分の手を見た。

そんなに変わっていない。今の私は大人の姿になっているはずだから、もし子どもの姿になっていたとしたら目線の高さは低くなっているはずだがそんな感じもない。

「なによ、何声を上げて…」

そう言つて、身を乗り出すと、近くにあつたガラスに自分の姿が映し出された。

「って…なによ、コレ…」

そこにいたのは、見たことのない少女だった。

歳は10代後半ぐらい。髪はポニーテールにして高く結い上げられていた。

「……っ！」

視線を自分の服へと移すと、自分は袴を着ていて、左腰には小太刀が下げられていた。

「なに…なによ、これは…っ」

悲鳴混じりに声を上げたとき、私の視界は突然真っ暗になった。

「……っ！！」

撫子は飛び起きた。

心臓の音がばくばく言っている。

辺りを見回すと、そこは和室。目が覚めたら元の世界に戻っていたという夢のようなことはなく、撫子は沈んだ気持ちになった深いため息をついた。

「…変な夢を見たわ」

いつもは、大人の姿になって壊れた世界をさまようだけの夢なのだが今日は違った。

最後の方、撫子は全く知らない少女になっていた。

「変に目が覚めてしまったわ…」

部屋の中は暗かった。だが、わずかに襖の外から光りが見え、暗闇に目が慣れるとなんとか周りが見えた。確信はないが、寝てからそんなに時間は経っていないのではないかと思う。

撫子はもそもそと起きあがり、外の空気でも吸おうと思って立ち上がった。

屯所内をうろつかず、部屋の前にいるだけなら叱られないだろう。レインを起こさないように（寝るのかどうかもよくわからないけど）静かに襖を開けて、素早く身を滑り込ませてそっと閉じる。

夜風が頬をくすぐり、月の光が撫子を照らした。

雑草や植えられている木の葉はざわざわと静かな音楽を奏でており、静寂に包まれているはずの夜に音をもたらししていた。

「気持ち良い…」

思わずつぶやき、撫子は裸足のまま中庭へと足を踏み入れた。

小石が足に当たって少し痛かったが、元の世界では感じることも出来ない風景に魅了されていた。

そして廊下の縁に腰をかけ、月を眺めた。夜空にはきらきらとたくさん星が瞬いていて、まるで宇宙のようだと撫子は思った。

「きれい…」

しばらくこの景色を眺めていよう、そう思った矢先…静かな凍り付くような声がかかる。

「…おい、お前」

ぞわり、と背中に悪寒が走った。

声のかけられた方を見ると、そこには土方が腰の刀を抜いていた。
いずみのかみかねさだ
和泉守兼定のすらりとした刀身が真っ直ぐに撫子に向けられている。

「ここで何をしている」

「何をしているって…」

部屋から出たことを咎められているのだろうか。しかし、出たと
言ってもたかが数歩の距離。撫子の様子を見て、逃げだそうとして
いるようには見えないはずだ。なのに、ここまで冷たい態度をされ
る覚えが全くなかった。

「答える！その部屋にいるガキに何か用か？ magari なりにも、新
撰組屯所に入つてのんびりしてるなんて良い度胸じゃねえか」

「……は？」

声を荒げて詰問する土方に撫子は素っ頓狂な声を上げる。

彼の発言はどこかおかしい。それだけはわかった。だが、その原
因が全く持つてわからなかった。

「言っている意味がわからないわ。私はここにいるのよ」

「ああ？何言つてやがるんだ。女一人でここに侵入した度胸は認め
てやるが、それを見過ごすほど俺は甘くねえぜ」

「だから…」

そこで、撫子ははっとした。

視線が、高いのだ。

「…まさかつ」

「…待て！」

土方の静止の声を聞かずに撫子は立ち上がり、自室へ戻って鏡を
引つ張り出した。

「そんな…っ！」

そこにいたのは、大人の姿をした撫子だった。

第七幕「夢の姿」(後書き)

やっぱり、大人バージョンは登場させないと！

30近い土方さんにとってはほぼ娘の歳になってしまっ…。

第八幕「ヒロインの違い」（前書き）

これはネタバレを含む可能性もあったりなかったりします。

第八幕「ヒロインの違い」

「はあ？お前があのガキだつて？」

「そうよ」

鏡を見て驚愕のあまり呆然としていた撫子を追って来た土方は、素早い動きで撫子の腕を掴み、動きを封じると尋問をした。

撫子としても、あまり痛い思いはしたくなかったので必死になつて自分はあるの九楼撫子だとずいぶん時間をかけて話したのだが……あまり信じてはもらえていない。

「私だつて、信じられないけど……なつちやつたものはしょうがないでしょ」

「……まあ良い。とりあえず、服を着直せ」

「はい？」

しごくあつさり信じているんだか信じていないんだかよくわからない反応をされてしまつて、眉を潜めた。拘束されていた腕は、ゆつくりと放される。

「あの……」

一体全体どういうことだろうと思ひ、声をかけるが「お前、自分の格好わかつてるのか？」視線を床に向けて土方が言う。

そこでようやく気がついた。

「……なっ！」

撫子は寝間着を着ていた。それは、寝る前るときと変わらない。だけれども、子どもサイズに合わせて着られていた白い寝間着はいまやつんつるてん。裾からは白い長い足が伸びていて、胸元はすごく苦しい。ふと下を見ると、自分の谷間が見えた。

子どもの自分にはよくわからないが、とにかくはしたない格好だということとはわかつて反射的に胸元に両腕を隠すようにあてる。

「みみみ……見ないでくださいっ！」

「だから隠せと言ってるだろ！」

「そんなこと言われたって！」

「お前、今は立派な女になっているっつーことを少しは自覚しろ」
そういえば、土方の視線がさつきから床の方を向いている。頬を赤らめて……ということとはなかったが、不機嫌そうな表情だ。

とすると、すぐ近くからドタドタという足音が聞こえてきた。

「どうしたんだ！」

勢い良く襖を開けたのは、平助だった。恐らく、先ほどの撫子の声を聞きつけてやってきたらしい。

「つて……土方さん、その女誰だよっ！」

そして、はしたない格好の撫子を見て両手で目を覆い隠した。

「……指の隙間から目が見えてるわよ」

健全男子すぎる平助の反応に、冷静に突っ込みを入れた。

「し……しょーがねーだろ。それより、お前誰だっ！ 土方さんを夜ばいに来たとか……？」

「なわきやねえだろ。よく見る。九楼撫子とかつつー、あの小娘だ」

「は？ いや、だってそいつまだガキだったじゃん。そいつどう見ても、俺と同じぐらいの女にしか見えないぜ」

「俺にも信じられねえが……急激に成長したらしい」

「え……あれが、これに……？」

そろりと大人になった撫子を見つめる。若干頬が赤い。

「……千鶴の歳とたいした変わりないのに、これか……」

「……それは、本人の前では絶対言っな」

「あ……ああ、そうだな。土方さん」

撫子はなんだか、千鶴という少女に同情した。信頼されてはいるようだが、ある部分に関してはとても触れてはいけない暗黙の了解になっているらしい。

「難儀すぎるわね……」

大人になっても発達しない人間がいるのは、なんだか可哀想に思えた。

「……とにかく、女の姿では屯所には置けねえ。あいつの袴に着替えて、広間に来い。平助は他の幹部連中を集めてこい」

「いや、でもさー……土方さん」

「あ？　なんだ、何かあるのか」

「千鶴は良かったけど、こいつ男の格好するには無理があるような……」

「とにかく、はた目でもそう見えりゃあ良いんだ。それと、その話もあいつの前ではするな」

土方は立ち上がり、勢い良く襖を閉めて出て行ってしまった。

もう行ってしまった背中に向かって平助が「あ……ああ」と、わかってるんだかわかっていないんだかわからない返答をしていた。

「……とりあえず、出ていってもらえると嬉しいけど」

未だ、どこぞの娼婦のような格好になっている撫子が平助にそう言った。

「じゃじゃじゃあ、俺、行くな！」

慌てて出ていった平助がいなくなったのを確認し、撫子は押入に入れられていた袴を手にとった。

「って……やっぱり、一人で着るのは大変よね」

さすがにこの成人女性の身体では着替えを頼むに頼めない。どうしようかと悩んでいると、レインの寝ぼけた声が聞こえてきた。

『あー、はいはいー？　どうしたんですかー？』

「あ、レインっ！　どうしてたのよ」

『いえー、ちょっと困った王様のためにいろいろとって……どうしたんですかー？　その姿は』

レインを見るのは初めてだったようで、少し驚いた声を上げていた。

「目が覚めたらこうなっていたのよ。とりあえず、あなた袴の着方とかって知ってる？」

『ははー……それは困りましたねー。ああ、袴ですかー？ 一応、データはあるんで助言するぐらいならできますよー』

その言葉を聞いてほっと息をついた。

「って……最初からレインに聞けばよかったのかしら……？」

平助に着替えさせてもらったときのことを思い出した。その言葉を聞いたレインは、いやいや、と訂正する。

『そんなこともありませんよー。ボクは言葉で言うだけで、実際にはしてあげられませんからねー』

「それでも、あんな恥ずかしい思いをするぐらいならレインに聞いた方が良かったわ……」

今更ながらそう後悔して、レインに袴の着方を教えてもらったのだった。

結果。レインの言葉が正しかったことを思い知る。知識はあつても、実際に行うのはこんなにも大変なことなのだと思つた。

第八幕「ヒロインの違い」（後書き）

ちよつとしたイベント気分で。

ちなみに、私は千鶴ちゃん大好きです。

薄桜鬼の男性陣は、そんな千鶴ちゃんて良いんです。はい。

第九幕「ヒロインはさらわれるものである」(前書き)

ネタバレあるかも。

第九幕「ヒロインはさらわれるものである」

決死の思いで着替え、ひやりとした廊下を歩く。月明かりに照らされた廊下は、炎がなくて十分に視覚を確保することができた。

「……他の幹部の人を集めるって言うていたけど、それって私のことについて話し合っつてことよね？」

手のひらにレインをのせて、そう聞く。

普通の着物より袴の方が動く分には申し分ない。撫子はいつもの歩幅で歩くことが出来て、小さく息をついた。

『そうですねー、なんせ大きくなってしまいましたからねー。ここは男所帯ですし、若い娘さんに何かあつては大変ですしねー』

「……なんだか迷惑をかけて申し訳ないわ」

仕方がない自体とはいえ、それは本心だった。

「でも、仕方がないわよね。もう少しの辛抱よ、撫子……」

ぶつぶつと自分で自分を励まして、レインを持っていない方の拳を握る。

角を曲がると、庭の方からかさ……という音が聞こえてきた。

「何かしら？」

気になり、撫子は立ち止まる。

『撫子くん』

「え？」

普段、名前なんて呼ばれないので驚いて手のひらのレインを凝視してしまった。

レインは緊迫した調子の声を出している。

「どうしたの、レイン？」

『早く、離れましょう』

撫子は首を傾げた。何を言っているのだろうか。

「突然、そんな声出しちゃって。レインらしくないわよ？」

『とにかく、ここから離れ 』

レインの言葉は途中で終わった。

「……………？ レイン？」

ふ……………と、撫子に影がかかった。

「え……………？」

『撫子くんっ！』

せっぱ詰まったレインの声。

振り返った瞬間、強い衝撃が走り撫子の意識は闇へと誘われた。

痛みと、話し声で目が覚めた。

両手首は何かでしばられており、支柱に繋がっている形で座らされている。口もとには布があてがわれ、声を出すことはできない。

「……………あれがあの風間の言う、新撰組土方の小姓か。確かに、女だな」

知らない男性の声が、隣の部屋から聞こえてくる。

今、撫子は薄暗い部屋の中に閉じこめられていた。隣の部屋の襖から漏れる光と、窓から漏れる月の輝きが見える。

「こいつを人質にとつて、あの風間のやつに一泡吹かせよう。もう、脅迫状は送りつけているのだな？」

ああ、ともう一人、男性の声が聞こえてくる。よくはわからなかったが、息づかいと布のすりきれる音からして10人近くの間が隣の部屋にいたことが想像できた。

とたん、先ほどまで閉まっていた襖が開けられる。

「……………目が覚めたか」

下卑た笑みを浮かべて、男が撫子を見下ろす。何も話すことができない撫子は、まだはつきりしない意識のまま男性を見上げる。

「土方付き小姓の男……………。ずいぶんとおなこのような容姿をしてい

るという噂があり、あの風間も狙っているという噂を掴んでさらってみると、女だったとは」

太い指で、撫子の顎を掴む。すぐ近くに男性の顔があり、撫子せめて脅えた様子を見せないようにとキツと睨みつける。

「女のお前が何故、新撰組にいるのだ？」

そんなの私を知りたいわよ、と撫子は心中抗議する。

「この容姿でよくおなごだと見破られなかったな。胸だってあるじゃないか」

「　　っ！」

手が伸びて、撫子の胸を掴む。その力と、得体の知れない恐怖で撫子はビクリと震えた。

私、何をされるの　　！？

男の顔が近づいて、撫子の耳元でささやく。息がかかって、身震いをする。

いやだ、気持ち悪い。

「へ……まだ誰にも食われていないなら、俺がやっちまおうか？
どうせ、風間が来るまでまだ時間はあるんだ」

食う、やる、その意味。

恐怖で、身がすくみそうになった。

布で口を塞がれているとはいえ、ギリ……と強くそれを噛む。より敵意を込めた視線で睨み、臆さないという意思表示をする。

「良いねえ……その強気な態度」

舌なめずりをして、男の手がさらに伸びる。

震えないように努力しても、身体は言うことを聞かない。自然と目が潤みそうになるが、それも耐え、目を瞑った。

みんな……、助けて……っ！

心の中で、愛しいあの課題メンバーの顔を思い浮かべる。

「おい、何してやがる」

低い声がかかった。男の肩がビクリと跳ね、その手が止まる。恐る恐る男が振り返り、その名を呼んだ。

「不知火……」

そこにいたのは……なんというか、この時代には考えられないほど個性的な服を着た男性だった。身体にフィットするような服に、腕には入れ墨が彫られている。これだけ言うとおの壊れた世界にいた、やがつく職業の人っぽい人と似ているが、その印象は全く違っていた。あの白い人はどこもかしこも軽そうな雰囲気だったけど、この人は軽さの中に狂気を潜ませている……そんな印象を受けた。「風間が狙っている小娘を手に入れたって聞いてみりゃあ、なんだこれは？」

不知火と呼ばれた男は不機嫌そうに眉を潜め、撫子を見下ろす。

「は……？ いえ、あの……何を言って」

男も言っている意味が理解できていないのか、不知火に恐る恐る訪ねている。

恐らく、この不知火という人物はなにかしら発言力を持っているのだ。撫子は考える。

「は？ だから、こいつなんだよ？」

撫子を指さして、呆れたように不知火は言った。

「いえ、だから……新撰組にいた土方付き小姓の女……ですが」

「はあ？」

未だかみ合っていない会話。この不知火という男は、もしかして雪村千鶴の顔を知っているのだろうか。

苛立った様子で、不知火は男を蹴飛ばした。あまりにも不意打ちだったので、男はあっけなく地面へとたたき付けられる。いつの間にか不知火の後ろに控えていた男たちがざわざわと音を立てた。

「何を言ってやがる。人違いにもほどがあるぞ」

「い……いえ、でも確かにこの小娘は新撰組の屯所におりました……っ！」

後ろにいた一人が、飛ばされた男の肩を持ち不知火にそう説明す

る。

「……なんだと？」

ぴくりと不知火の眉が動く。

「あの屯所にいて、土方付き小姓の部屋からこやつが出て来ておりました。目撃に合った格好も同じ。間違いはないと思い、背後から襲いここまで連れてきた所存でございます」

先ほどの男より、いくぶん丁寧な口調で男は説明をする。

「……確かに、あの嬢ちゃんの来ていた袴と同じだな」

ふむ、と指先を顎につけて不知火は少しの間考える。そして、地面に膝をついて撫子につけられた布を取った。

「お前、どうして新撰組なんかにいたんだ」

無感情な問いをかけられる。その手には、拳銃が握られていた。撫子の目線に気が付いたのか、不知火はなんでもないことのように言う。

「ああ、これは拳銃つつつてこれを押せばすぐに火薬が引火して鉄の塊がここから出てくる。火縄銃と違って、撃つ手間もあまり必要ない。嬢ちゃんの腹なんてすぐに穴が空くぜ？」

「……知っているわ」

この自体にこれは非常に貴重なものなのだと思う。そして、それがいかに危険であるものなのか撫子は理解していた。

「口は聞けるみたいだな。じゃあ、もう一度聞くぞ。何故、お前は新撰組にいた？」

言わなければ、撃つ。遠慮容赦ない無言の脅しをかけられる。撫子の額にじわりと汗がにじむ。

「……言っても、信じてくれるかどうかかわからないわ」

「それは聞いてみないとわかんねえな」

飄々と、不知火は答えた。

嘘をついても仕方がない。この不知火という人物は雪村千鶴のことを知っているようだし、彼らと新撰組の関わりは全くもってわからなかったが撫子は自分の身に起きたことを素直に説明した。

その結果、自分が殺される可能性はいなくなかったが、少しでも自分が生きる時間を長引かせるためにはこれしかない。

第九幕「ヒロインはさらわれるものである」(後書き)

一応、撫子がつかまったのは長州藩の人。薩摩と長州はなかよしこよしの設定で。

それと…薄桜鬼雪華録〜沖田総司〜発売おめでとぅーっ！沖田さんが可愛すぎます。

第十幕「何かと置いていかれる風間さん」(前書き)

ネタバレあり？

第十幕「何かと置いていかれる風間さん」

話を聞き終えた不知火は、疑うような眼差しで撫子を見つめる。

「おいおい、それが本当だとしたらあのお姫様が帰ってくるにはそのレインってやつも必要で、嬢ちゃんだけさらっても意味がないっつーことか？」

「あ……レインっ！」

今まですっかり忘れていたが、この場にはレインがいない。恐らく、襲われたときに落としてしまったのだらう。

不知火は頭をかかえる。

「おいおい……そのレインは新撰組の連中の手だらうな。……面倒くせ。俺は降りるぜ」

「降りるって……ちよつと！」

自体を把握するなり、背を向けて歩き出した不知火。まさかの自体に撫子は呼び止めるが、その足を止めてくれることはなかった。

「あとは、お前らにまかせるぜ。ああ、そのうち風間のヤローが来たら事情を説明して引き取ってもらうことだな」

最後の方は撫子に向けられた言葉だらう。片手をヒラヒラさせて、その場から彼は退散してしまった。

「え……ええええ……っ」

全て投げ出された状態になってしまった撫子はもう、どう反応して良いか全くわからなかった。

「……とりあえず、風間にとつての人質には使えそうですね」

うちの一人がそう言う。傍らにいたもう一人も頷き、それは全体の意見となった。

「顔を隠してこの小娘を例のおなごとして扱い、やつの前で殺しましょう」

状況は最悪だった。

長州藩から薩摩藩にいる風間に伝令が入り、風間が狙っている『新撰組土方付き小姓』を手に入れたという情報が入ったのは深夜のこと。

「どうも怪しい情報ですが、どうしますか？」

風間に使える鬼。赤い長い髪とひげをたくわえた天霧が言った。

黒い着物に身を包む、金髪の鬼、風間千影は宿の窓際に座っており、ゆったりと煙管吹いていた。天霧の言葉を聞いて、目をちらりと向けると煙を口から出して言う。

「……黒い髪の袴を着た女だという情報をやつらは得ている。新撰組にいる女はあいつしかない。いるかどうかは確かでないようだが、やつらの得ている情報には間違いはない。仮にそれが本当だとしたら、俺がやつらから奪う前にさらうとは気に入らないな」

ゆるり、と煙管を懐にしまい、風間は立ち上がる。

「いいだろう。この俺にたてつくとは良い度胸だ。乗ってやろう」
腰に刀をこさえ、薄く笑った。

「たかが雑魚に俺の妻をさらわせる新撰組の連中も、まったく屑ばかりだ」

天霧はそれが出動の命令を認識し、風間の後ろをついていく。

「風間」

「なんだ、天霧」

背中越しに問われた声に、面倒くさそうに風間は返した。

「最近発売されたばかりの『薄桜鬼 雪華録』に風間の章がなく、オープニング、生足をさらけ出すシーンしかなく、非常にむしろくしゃしている気持ちはわかりますが、他人にあたるのはどうかと思います」

「黙れ。それぞれのルートによって『風間さんちょっと良い人』とか『あいつ結局どこ行った?』とか『ラスボスかよ』とか『婚活鬼

乙』とか好き勝手言われているなんて誰も知る必要はないことだ」

「風間、墓穴を掘っています」

「というか、これはなんだ？　なんで突然こんなことになっている」

「書いている人物が、雪華録の宣伝をしたかったようです」

「くだらん……天霧。俺の妻の出ているシーンだけ編集して届けろ」

「この時点で、人格が崩壊していますよ。風間」

「黙れ。殺されたいのか、楓」

「私は有心会のメンバーでも楓でもありません。CLOCK ZER
OのドラマCDネタが入っていますよ。誰がわかるんですか、こ
のネタ」

「……ふん、俺たちが使うはずのない横文字を使っている時点でこ
の俺たちのこのシーンはただの噛ませ役だということはわかってい
る。今更だろう」

「それもそうですね」

黒の羽織をなびかせ、風間と天霧は九楼撫子の捕らえられている
場所へと向かった。

「来てやったぞ、雑魚共。俺の妻を渡してもらおう」

あくまでも見下した様子でそう言い、人質が捕らえられている場
所へと案内されようとするが……。

「……おっと、待ちやがれ。誰も渡すとは言っていないだろう」

一人がそう言い、気が付いたときには周りを囲まれていた。

「……ふん、大方雑魚共の考えることは予想していた」

風間は刀を抜き、その刀身の切っ先を敵へと向ける。鈍く、その
刀身が光る。

「死ね……っ！」

片手で刀を振り下ろそうとしたとき。

「ご用改めである、新撰組だっ！」

背後の方から、太く強い声が聞こえた。

「……何？」

浅葱色の羽織の羽織が目にとまった。

「……よお、婚活鬼さんじゃねえか」

長い黒の髪をひとくりにまとめ、するどい眼孔で風間を睨み、刀のきつさは微塵も外れることなくたたずむその男。

「……土方、歳三か」

吐き捨てるように、風間はその名を呼んだ。

土方にまで婚活鬼呼ばわりされてしまうのは、作者の愛情ゆえである。そして、この緊迫した空気の中突っ込むことは許されなかった。

「預かりものの餓鬼を連れ戻しに来たって言うのに、てめえに会うとはな」

「預かりもの……だと？ お前は、俺から雪村千鶴を預かっているという意識があつたとは驚きだな」

「はあ？ 何言つてやる」

微妙にかみ合っていない二人の会話に、斉藤一の声がかかった。

「副長、恐らく風間はあることを知らないのでしょう」

「そうみてえだな。斉藤、お前は先に行って来い。もう時間はあまりないようだしな」

『はいー、あちらの準備もそろそろ良いみたいでー。お迎えも来ますしー』

どこからか、軽い調子の声が聞こえてきた。

状況を飲み込めなかったが、自分より先に雪村千鶴を奪われるのはしゃくにさわり、駆け出そうとした斉藤に向けて刀の切っ先を向ける。

「俺を置いて話を進めるとは良い度胸だな」

斉藤も、腰に手を当てて構え静かな声で睨みつける。

「お前に話す必要はない」

「ふん……小汚い犬が」

「俺も忘れてもらっちゃあ困るぜ」

土方も、風間に刀の切っ先を向け、言う。
緊迫した空気が、流れる。

「あーはいはい。その辺にしておいてくださいね」

突然、斉藤の声がした。

土方は斉藤を睨みつける。

「おい……斉藤、何言ってるんだ」

睨みつけられた斉藤はどういうわけか、狼狽えている。

「いえ、副長。俺はそんなこと一言も……」

「あの、ちょっと。聞いていますか？ 邪魔なんですけど」

「……斉藤、俺に向かって邪魔とは良い度胸じゃねえか」

「いえ、だから副長。俺は何も言ってる……」

「はあ？これがお前以外の声に聞こえるわけ……」

「おい、お前らの後ろにいるのは誰だ？」

風間の声で、ようやく二人は気が付いた。

第十幕「何かと置いていかれる風間さん」(後書き)

グダグダ展開。もう、思いつくままですね。

第十一幕「鳥海さん対鳥海さん」(前書き)

ゲーム自体のネタバレ大あり。

第十一幕「鳥海さん対鳥海さん」

「ようやく気づいてくれました？　ボク、微妙に傷ついちゃってるんですけど」

そこにいたのは、珍妙な男だった。

髪は短く、銀色で、目は細い。身体にぴったりと密着している服に、柔らかそうな白い上着を羽織っている。

『ビショップ、ようやく来てくれましたねー』

先ほどの軽い声が聞こえてきた。聞こえた方向を見ると、どうやら斉藤の刀にぶら下がっている謎の人形から聞こえていた。

その口調からすると、知り合いらしい。

その男に対する斉藤の行動は早かった。風間に向けていた切っ先を、すぐ自分の背後に立つ男へと向ける。風間の目には捕らえられないほどの速度であったが、常人ではありえないぐらいの素早い早さであった。

「いつから、そこにいた。俺と副長に気配を悟らせず近づくとは何者だ」

ピタリ、と刀身を男の首筋に当てて斉藤は低い声を出す。男は特に驚いた様子もなく、斉藤を見つめている。

「それと、どうして俺と同じ声をしている」

「それは、声優が同じだからでしょう」

「せいゆう……だと？」

「ボクとしても、全然キャラが違うあなたと同じ声優だなんて信じられませんけどね」

珍妙な男は飄々と言った。

「ボクなんて、ちまたではケンカップルって呼ばれるぐらい仲が良いですから。あなたなんて、名前を呼んでもらうだけで耳まで真っ赤になっちゃうって聞きましたよ」

「……それは仲が良いと言えるのか？　というか、なんだその情報は」

「ラブラブです。あの生意気さが可愛いんです。ちなみに、暑さのせいで作者が本来このキャラが知ることのない設定や話をしゃべらせているんですよ。その鬼さんが良い例でしょう。キングといい、作者といい、ボクを使いつ走りにしすぎじゃないですか？」

最後の方は、この場にいない人物へと向けられていた。

「ああ、それと気配を悟らせずに来たのは、ただたんにこの空間に現れたからです。クイーンを迎えに、ね」

「クイーン、だと？　俺の妻のことか」

「風間、余計に話をややこしくさせること言うんじゃない」

「聞き捨てならないな。俺の妻を奪おうとするとは」

「あんたはもう少し人の話を聞いた方が良いと思うが……」

「それにはボクもどーかんです」

「同じ声で次々にしゃべるな！　どっちがどっちかわからなくなるだろう！」

土方が苛立った声を上げる。

「……しかし、副長……」

「そう言われましても。ボク、これが地声ですし。

ちよつと、そのあなた。今すぐ声優変えてください。ホラ、若さんとか立　さんとかいるでしょう？」

「どうして渋い声ばかりなんだ。声優自体は素晴らしいと思うが、俺のキャラには合っていない。というか、あんたが変える。俺があんたに配慮する必要はない」

「ボクもあなたに配慮する必要はありませんけど？」

斉藤と、ビショップと呼ばれた男が軽く火花を散らす。

『あーはいはい。自分の声優の取り合い喧嘩している場合じゃないでしょう』

レインが二人を止めようと口を出した。

「あんたは黙っている」「レインさんは少し黙ってください」

同じ声でぴしゃりと言われて、レインが不満げな声を漏らす。

『なんだかビショップに生意気なことを言われている気分ですねー。戻ったら、覚えておいて下さいねー……』

二人には聞こえていなかったレインの声は最後の方は黒い物騒な独り言になっていた。

二人の戦いは激戦の一言だった。

「そもそも、どうしてあなたみたいな人が攻略対象なんでしょうかね。ボクみたいに乙女ゲームならではのドキドキな展開なんて少ないでしょう。女性の指先を自分の唇に当てるなんて芸当、あなたでできるんですか？」

「そんなものは関係ない。俺は俺の武士の魂をつらぬくまでだ。お前のような島原で毎夜遊んでいそうな人間には言われたくはない。それよりもお前は耳たぶという稀な場所から女性の血を飲むことができるのか？」

「ずいぶんとマニアックな趣味をお持ちで。それなら、手作りのストラップやブレスレットを女性にプレゼントするなんて芸当あなたにはできるように思えませんが」

「そんなもの、俺と彼女の間には必要ない。彼女は俺の手のひらに落ちた桜の花びらだけで幸福そうな顔をしていた。しかもそれを今も大事に持っている」

「そうですか。なら、撫子さんをからかったときのあの生意気な顔と恥ずかしそうな顔なんて、あなたのところじゃないでしょう」

「くだらないな。『最後まで斉藤さんのお傍にいたいです』と言ったときの千鶴の力強く、誠実な眼差しをお前は知らない」

「何を言っんです。撫子さんの『私もあなたが好きだったみたいだわ』というセリフとか『好きなんだから、でも大嫌いよ』とか『最近、さみしかったのよ』とか可愛いこと、おたくの千鶴さんは言う

んですか？」

「そんな言葉では言い表せないほど、俺と千鶴は繋がっている。千鶴からの接吻の描写だってあるのだぞ」

語弊があつたようだ。口喧嘩の激戦である。

「おい、ちよつと待て」

ようやく土方が口を挟むが、二人は止まらない。

「へー…そうですか、なら撫子さんは……」

「それなら、千鶴は……」

『ヒロイン自慢は他でやって欲しいですねー』

「というか、それは斉藤ルートの話であつて、俺はそれを聞いて複雑な心境なんだが」

「珍しく意見が合うな、まがい物。俺も同じだ。妻が他の男と添い遂げる話なぞ聞きたくはない」

風間が土方に同意する。

「お前は大抵、悪役だけだな」

「ふん……初めてプレイする人間の誰もが通るノーマルルートでは俺のルートだな」

「最後までいくには、一人は攻略しないと駄目だろうが」

「なら合わせて2回、俺のルートに進むことになる。良いことだ」

「めっちゃめっちゃ思考が前向きだな、おい」

『おっと、こちらでもルート自慢ですかー？』

微妙に自らのルートの千鶴が可愛いことを自慢しようとした矢先、レインの突っ込みが入り二人ははつとしてやめた。

第十一幕「鳥海さん対鳥海さん」(後書き)

ちよつと、キャラで遊んでみたかったです。ごめんなさい。
斉藤さんのキャラが崩壊しています。

……先生、反省はしているけど後悔はしていません(キリッ)

第二幕「ビーチポジション撫子」(前書き)

ネタバレあります。

第一二幕「ピーチポジション撫子」

その頃、撫子はというと……またもやさらわれていた。

入り口の方が騒がしくなつて『風間』、『新撰組』という言葉が聞こえてきたとき、前者の方はよくわからなかったが新撰組の人たちが助けに来てくれたと思つた。

安心して、息をつくとすぐに窓の方から突然人が倒れる音が聞こえてきた。

「へえ……新撰組の土方付き小姓が捕らえられてるって聞いたから来てみれば……これはどういうことなんだろうね？」

中性的な声だった。

顔は布に隠れてよく見えないが、桃色の着物を身につけた少女とすることはわかつた。

「何者だ……っ!？」

せつば詰まつた男たちの声が聞こえる。そう言つたところにはまた一人、少女によつて切り捨てられる。

それが常人の技じゃないことぐらい、撫子にはわかつた。

「答える義理はないね。さあて、お前……来てもらおうか」

窓から浮く風に揺らされ、少女の着物がなびく。少女の身体に不相応な、大振りの刀を撫子に向ける。暗く、顔が見えないはずなのに瞳だけが金色に光る。そこからはみ出す髪の毛は……白い。

「あなたは……？」

縄を切られ、立ち上がらせられる。

「そんなくだらない質問は良い。俺と来い」

低い声でそう言われ、少しでも反抗したらその手によつて殺されるということを経験的に感じる。背筋に緊張が走り、頬から汗が伝い落ちる。

「事情ぐらい、説明してもらおうかな……。可愛い可愛い、俺の妹はどこ行つたのかな」

妹。その言葉の意味を理解したとき、少女の顔がはつきりと見えた。

「雪村、千……鶴……さん？」

その少女は雪村千鶴そっくりの顔をしていた。

少女は上品に笑い、先ほどとは全く違う口調で話す。

「よろしく願いますわ」

ただ、その笑顔に秘められた冷酷な心までは隠しきれていなかった。

撫子はもはや自分はピーチ姫ポジションだということに、なんとなく気づいていた。

（こんな心臓に悪いさらわれ方は嫌だわ……）

もう、なんだか泣きそうだった。

「へえ……じゃあ、お前は別の世界から来たってことになるんだ」

「……そうよ。だから、レインがいないと元の世界にも帰れないし雪村千鶴さんだって帰ってこれない」

撫子からの質問は一切拒否され、少女は自分の知りたい情報だけを撫子に求めた。雪村千鶴が女性だということは少女もわかっているようだし、今更隠し立てする必要はないと思い、慎重に言葉を選びながらこの事情を説明する。

この少女はどこか雪村千鶴に執着しているようにも思える。だから、新撰組に自分を帰さないと彼女は戻るに帰れないことを強く説明する。

今は捕らえられていた宿から少し離れた場所。人気のない裏通りを歩いている。隣を歩いている形にはなっているが、撫子は戦いの素人。少女に背を向ければすぐにでも切られることは明白だった。命を簡単に捨てるつもりは毛頭なかったので、大人しく彼女についていく。

「……ふうん。じゃあ、どうしようかな。そのレインってやつを奪ってやるのも良いけど……まだ、準備が揃っていないからな」

彼女は考える様子でそういう。撫子の今後の扱いを見当している

ようだ。

彼女の判断一つで生か死か簡単に決まるので、撫子は生きた心地がしなく、黙ってその様子を見守っている。

「そもそも、俺は沖田ルートでしか活躍しないんだからここは、千鶴が沖田を選んでるっていう前提で話を進めた方が良いな。そうしたら、俺が千鶴をいじめる理由だってきちんと立つし。沖田に堂々とちよっかいをかけられる……」

（なんか黒いオーラ出てるわよ……）

少女の背中から、あまり好ましくないオーラが出ている。沖田、と言っていたがなんだか沖田が可哀想にも思えてきた。

少女は満面の笑みでこちらを振り向く。仮面のような笑みがさらに怖かった。

「さて、じゃあ沖田さんを探しに行きましょうか」

「いえ……でも、その……沖田さんって、さっきの襲撃のときにいたんじゃない……」

確信はなかったが、戦力として期待されている沖田はいるはず。

そう思って、撫子は言ったが少女はなんのことなしに返答する。

「え？ この場合、体調が悪そうだからって言われて待機しているはずだよ。一応、慶応三年の斉藤と藤堂の離隊前っていう設定だからね」

「……そうだったの!？」

「沖田の労咳はきちんと設定に入っているから大丈夫」

「沖田さん、労咳だったの!？」

とんでもないネタバレをされて撫子は思わず突っ込みを入れてしまった。

ちなみに、撫子が山南に会ったときには彼はすでに羅刹になっている。

「さあて……楽しみだ。ちなみにこの話はゲームの世界の設定が重視されているから、アニメしか見ていない人にはあまりお勧めできないかもね」

「CLOCK ZEROと薄桜鬼を知っているって時点で、原作はプレイ済みの人が多いと思うわよ……。薄桜鬼はともかく、マイナーなゲームのキャラクターの私が主人公なんだから。ポータブル化してからさらに人気が出て欲しいわね……」

「俺には関係のない話だけだね」

「とういか、第十幕あたりからいきなりギャグ色が濃くなったわね……」

「作者も真面目にキャラを動かすのに飽きたみたいさ」

「いくら部屋が暑いからって、横暴だわ」

「くだらないことを言っていないで、さっさと歩きなよ。愚図は嫌いなんだ」

少女はそう言って、刀の柄に手をそえる。撫子は慌てて、歩く足を速める。

「そういえば、今更なんだけど……」

「なんだよ」

「あなた、名前は？　ここで私にネタをバラしても、さして問題ないでしょう？」

少女は少し驚いたように目を見開き、口元を緩ませて言った。

「　薫。南雲、薫さ」

「短い間かもしれないけど、よろしくね。薫さん」

「馴れ馴れしい口をきくな。ほら、いくぞ」

「ええ、そうね」

そう言って、二人は暗い夜道を歩いて行った。

月明かりに二つの影が照らされる。目的の地は……新撰組屯所。

第二幕「ピーチポジション撫子」（後書き）

薫登場。

関わらせにくいキャラだから、いろいろと困る……。

第一三幕「その頃屯所では」(前書き)

ネタバレあります。

第一三幕「その頃屯所では」

「あのさあ、君、誰？」

「オレが聞きたいのだが」

「ああ、もう。うるさいなあ。切っちゃうよ？」

「ここでいきなり殺人宣言をされても困るのだが……」

人気のない平助の部屋に、二人の男性の声が響く。

南雲薫の予想通り、沖田は新撰組屯所で待機を言い渡されていた。幹部全員が大広間に集まり、この事情を説明しようと待っていたところ、いつまで経っても撫子張本人が来ない。

土方が不審に思い、藤堂に様子を見させようとすると、廊下におきざりにされたレインの姿があった。彼（？）によると、撫子は謎の男たちにさらわれてしまったという。

言葉が「あっちよって」とか「だっちょ」とかいう長州のなまりだと、人形は言っていたので撫子をさらったのやつらの見当はすぐについた。

監査の山崎を調査に向かわせると、撫子はある宿に捕らわれているとの情報が入った。新撰組に女性がいることはとづくにあちらもわかっているのだろう。その口封じのためにも、撫子を取り戻しにいかねばならなかった。

『それに、あっちの準備もそろそろ整っているみたいですー。遅くならないうちに、合流する必要があります。あちらも、なんだか大変なことになっているみたいですしねー』

最後の方の意味はよくわからなかったが、ことを早く進める必要があることはわかった。

「じゃあ、お姫様を取り戻しに行きましょうか」

そう言って、刀を持って立ち上がった沖田に土方がぴしゃりと言った。

「総司、お前、体調が悪いんだろうが。屯所で大人しくしてろ」

沖田は頬を膨らませてジト目で土方を見る。面白くないと、顔にはつきりと書いている。

「土方さん、ずるいですよ。僕にばかり留守番をさせて」

「うるせえ。文句があるなら風邪治せ」

「だって、僕このままだと近藤さんのいない間に伊藤さんとか切っちゃいそうですよ？ それでも良いんですか？」

半ば本気でそういうことを言ったので、土方も自体のまずさを察知したのか平助に向いて言う。

「おい、平助。総司の面倒見てくれねえか」

「えー、なんで俺なんだよ。土方さん」

平助も出勤する気まんまんだったようで、沖田と同じく不満げな声を漏らした。

「お前、ゲームでは総司に続いて屯所持機が多いじゃねえか。気がのらねえからって、仕事しなかったお前のことを知ってこの扱いなんだ。離隊する前に仕事しやがれ」

「ちょ……土方さん、ネタバレネタバレ！　なんで俺が離隊するって知ってるんだよ！」

「なんでもありの『ぱろでー』というやつだからな。俺が知っていても不思議はないだろう」

「土方さん、『デー』の発音が出来ていませんよー。うわー、だっさーい。これだからおじさんは困るんですよ」

「お前は少し黙りやがれ、総司」

ということで、沖田・平助・永倉・山南を抜いたおなじみ幹部全員がご用改めに出た次第であった。

他の隊士達を動かさなかったのは、できるだけ隠密にことを運びたかったというのもあった。永倉を置いていったのは、伊藤に不審なことを悟らせないため。伊藤が永倉に積極的に引き抜こうとする動きは見えていたので、永倉には悪いがこのまま飲みに行ってもらうことにした。

山南はなんせ死んだことになっているので、問答無用で屯所持機ということだ。

「あーあ、つまらないの」

平助と二人取り残され、面白くなさそうに沖田はため息をつく。

「俺なんて総司のせいで置いてけぼりなんだぞ。罪悪感とか持てよ」

「嫌だよ、そんなの。それに、土方さんが全部悪いんだから」

誰もいない大広間で二人ため息をついた。沖田は自分の部屋で寝るという選択肢は全くないようだった。

「……あー、もう。むしゃくしゃするな。酒でも飲むか。総司、お前も飲むか？」

そう言つて、平助は立ち上がる。病人をいたわる気は毛頭ないようだった。

沖田は首を振つて「いや、お酒は良いかな。金平糖とかお茶とかあつたら嬉しいんだけど」

「それは遠回しに茶、入れてこいつてことか……」

「そんなことは言つてないよ。あれば嬉しいな、って言ってるだけで」

「はいはい、わかったよ。入れてくるつて。俺の部屋で飲もうぜ」
「うん、いいよ」

そう言つて沖田は立ち上がり、平助の部屋へと向かった。

廊下を渡り、真つ暗な部屋の中に入る。明かりをつけようとして明かりを探していると突然、まばゆい光が暗い部屋の中から発せられた。

「……………なに？」

右手を柄にかけ、すぐにでも抜刀できる準備をする。

「……………？」

光は一瞬で、中から一人の青年が出てきた。歳の頃は沖田と同じぐらいか、少し下。格好は奇妙で、青い長い布を全身に巻き付けている。髪の毛は沖田の感覚で言うところと短く、首筋あたりまでしかなかった。

一見、刀も何も持つてはいないし、戦闘力もあるようには思えない。けれども何を隠し持っているのかわからないので、油断だけはしないように慎重に青年に向かって問う。

「あのさあ、君、誰？」

静かな空間に、沖田の声が響く。

青年はどういうわけか、あたりを見回して焦ったように沖田を見つめる。

「オレが聞きたいのだが」

「ああ、もう。うるさいなあ。切っちゃうよ？」

「ここでいきなり殺人宣言をされても困るのだが……」

沖田がその気になれば、この青年はいともたやすく切ることができるだろう。そう、沖田は感じた。

「へえ……じゃあ、君は誰なのか……ごほっ……ごほっ！」

「！ おい、お前大丈夫か？」

突然咳が出た。沖田も作者も忘れていたが、沖田にはこのとき労咳によって微熱があつたし、本当に体調はあまりよくなかった。

余程のお人好しなのか、青年はかけよって沖田の背中を撫でようとする。それは全く持つて気休めにもならない。というか、その行動は見当外れであつた。

「ごほっ……！ ちょっと……きやすく触らないでくれる？」

「お前、そんなこと言ってる場合じゃ……。おい、近くに医者はいないのか」

「それに君つて、とんでもないお人好しだね……ごほっ！ 僕のこととは放つて置いて。じきに……おさまる……ごほっ！」

「どう見ても大丈夫じゃないだろう……」

「……いいから！ 殺すよ」

その言葉に、沖田の知られたくないという意志と殺害の意識を感じたのだろう。青年は黙つて、沖田の咳が止まるのを待っていた。

「……収まったか？」

「ああ、どうもありがとう。で、君は誰？」

心配そうに顔を覗く青年に、沖田は少しか緊張を和らげて言う。
自分を殺すならとくに攻撃されているはずだ。それをせず、ただ
沖田の背中をさすっていたところを見ると正真正銘のお人好しらし
いことはわかった。

「俺は、コスプレ……。じゃなくて、放浪者……。じゃあ駄目だよな。
加納理一郎だ」

「僕は沖田総司。新撰組一番組隊長」

「……新撰組の沖田、だと？」

青年……。加納理一郎が、驚いた表情をした。

「へえ……。僕の名前もなかなか有名なんだ。……。じゃあ、僕の機
嫌を損ねたらどうなるかはわかってるよね？」

静かな声を出して、刀に手をかける。

しかし加納理一郎は、沖田の予想を越えた発言をすることになる。

「じゃあ、お前のさっきのあれは……。結核。つまり、労咳か」

「……ふーん、それって誰から聞いたの？ そのことを知ってる人
って結構少ないと思うんだけど」

沖田の殺気が膨れあがる。加納理一郎は慌てた様子で言った。

「いや、誰にも聞いてはいない。俺はお前から見て何百年も先の
違う未来だ。新撰組、というのは歴史上でも有名だからな。たまた
ま知っていただけだ」

「違う未来っていうと……。もしかして、あの子が元いた世界の人と
か？」

「厳密に言えば違うが、そういうことになるな。……。俺にも理由は
よくわからんが、あつちで千鶴とかいう女と一緒にいて、政府のや
つらと乱闘していたら突然こっちに飛ばされた」

「千鶴ちゃんと……？」

沖田は少しホッとする。千鶴はまだ元気なようだった。

「でも、不思議だね。僕があの子と一緒にいたとき聞いた『理一郎』
って名前はもう少し幼い気がしたんだけど」

「……それには、いろいろ事情がある。あそこにいたやつと俺は別

人と思つてもらつてかまわない」

「ふーん……それは、あんまり口外しちゃいけないことかな」

「……そうだな。特に、あいつには聞かれたくはない」

加納理一郎に言葉に何かを感じたのか、沖田はそれ以上追求することはなかった。

馬に蹴られる趣味はない。

第二三幕「その頃屯所では」(後書き)

沖田くんが理一郎を挑発する。理一郎が、挑発に乗る。という図が
すんなりできてしまう。でも、まだそんな描写がないのが残念です。

第一四幕「すれ違い」

「とりあえず、自力で帰られるが……撫子が気になるな」

この場に彼の知り合いの赤毛の男がいたのなら「出たよ、理一郎のお嬢病」と発言したであろうが、それを言うものはこの場にはいなかった。

沖田はふうん、と興味なさげに相づちを打って「じゃあ、出ていけば？」と思いやりのかけらもないことを言う。

「そうしたいのはやまやまだが、撫子はどこにいるんだ？ お前達のところにいるはずなんだろ」

「あの子なら、今さらわれちゃったよ。ちょっと目を離れた隙にね」
「……なんだって！ おい、撫子は大丈夫なのか！？」

沖田のなんてことない態度に、理一郎は怒りをあらわにし沖田の肩を両手でつかみガンガンと揺さぶる。

「ちょっと、君、目の色変わりすぎ。どうせ捕虜なんだから、大丈夫だよ。……まあ、指の一本か二本はなくなっているかもしれないけど」

「ますます駄目だろう！ おい、そこはどこだ！ 案内しろ！」

「今、お節介で意地汚くて眉間に皺をいつも寄せている鬼副長がみんなを連れてご用改めしてるから大丈夫だって。待っていればそのうち帰ってくるよ」

「……お前、その副長のこと嫌いだよ」

「うん？」

うんざりした顔で理一郎が言うと、目をキラキラさせて沖田は笑った。しかもその笑顔は子どものように無邪気であり、腹の底にどす黒い何かを忍ばせているようにも見えた。

「それに、君みたいな戦いの素人が行っても足手まといだよ」

「……なんだと！？」

「だって君、刀だって持ってなさそうだし強そうにも見えないし。」

行っただって不審者扱いされてここに連れ戻されるのがオチだよ」

「なんでそこで不審者扱いなんだ！ この格好か！ この格好なのか！？」

「放っておけば解決しそうだし、僕たちはここで待ってようよ」

そう言つて、刀を置き、あぐらをかいて両手を頭の上にのせてくつろぐ体勢を取る。

（どうせ、僕はあの子を助けにはいけないんだし）

あの小さな身体と、朗らかな笑顔を向ける彼女の姿を思いうかべて、小さく息を吐いた。理一郎を見ると彼は気まずそうに。

「……確かに、俺は何もできない。だけど、諦めたくはない。今度こそ、あいつを助けたいんだっ！」

沖田は少しだけ興味を惹かれた。ただの何もできない素人という認識は変わっていなかったが、その瞳の奥の決意。命を賭してまで叶えたい願いが彼にはあるのだと感じた。

少しだけ、ほんの少しだけ彼に付き合っても良いかと沖田は思った。

「僕も暇だし、付き合っても良いよ」

「どういうことだ？ さっきと言っていたことが全く違うじゃないか」

いぶしぎな顔をしている理一郎の横を通り抜け、飄々と沖田は言う。

「気が向いたんだよ。僕の気がまた変わる前にさっさと行こう。それと、本当に足手まといなら見捨てるし場合によっては斬っちゃうから」

「……望むところだ」

わずかに殺気をにじませて言ってみたが、理一郎は口元を少しだけ歪ませてそう答える。あの子が来たという場所は争いが無いようなすごく平和な場所だと思っていたけど、こんな表情をできるのは死闘を生き延びた人間しかない。

沖田も楽しくなつて口角の皺を深くする。実際には動くことはな

いのだが、腰にぶらさがった刀が嬉しそうにカタカタと鳴っている気がした。

「……面白いね、君」

「お前は性格が悪そうだ」

「えー、僕は褒めてあげたのにどうしてそんなこと言われなきゃいけないのかな？」

「寅之助と終夜の方がまだ扱いやすいぞ」

「君に扱われるのは願い下げだからね」

「……口の減らないやつだな」

「君はよくからかわれやすいつて言われたい？」

図星を付かれたのか、理一郎は押し黙った。予想が的中して沖田はせせら笑う。

「あ、やっぱり。それと、その寅之助と終夜って人たちはこっちに來ているのかな？」

「俺があつちにいたときはいたが、どうだろう……。あの乱闘で、もしかしたら飛ばされているかもしれないな」

「ふうん……」

その時、沖田は気づいていなかった。というか、忘れていた。茶を入れに行ったはずの藤堂平助が、いつまで経っても帰って来ないことに。

「はあ！？　いないだと！？」

「そのようです、副長」

「なーにやってるんですか。全く使えない人たちですね」

『今のいままで口喧嘩していた君がいうべき台詞じゃないですねー』
齊藤とビショップの口論を土方とレインが協力し『上司の力』を持って止め、二人はようやく収まった。

ちなみにその決定的な一言は以下の二つ。

「舞台の上で風間と告白対決させるぞ」

『ウサギロボに乗せて神々の黄昏とか起こさせますよー』

効果は、観面であつた。

というか、二人はすでに経験済み（つていうことで、そのときのことをもう思い出したくないほどのトラウマとなっていた。

「うつ……恥ずかしかったぜ」という副長の声が頭に響いて……！」

「ああ……ウサギロボの唯一の攻撃手段が自爆だなんてやめてください……っ！」

二人とも、頭を抱えてうずくまってしまった次第である。

ちなみに元ネタ両方わかる人がいたら、作者とお友達になれそうな気がする。

「片づいたな」

『ですねー』

「お前たち、何気なく意気投合してはいないか？」

満足そうに頷き合う二人（？）に思わず風間が突っ込みを入れる。天霧は空気キヤラになってしまったが、きちんという。後ろで哀れみを込めた目でずっと立っていた。

ともかく、その二人の争いのせいで遅れをとってしまったらしく土方一行が向かったときには、敵は全滅させられておりもぬけの殻となっていた。

かろうじて息のある人間を問いつめてみると「刀を持った女が……」とだけ言っていたが、それだけでは全く状況が判断できない。

「おい、お前らのせいで俺の妻がどこぞの屑に誘拐されたぞ。この責任、どう取ってくれるのだ」

風間が青筋を立てて、腰の刀に手をかけた。

「おい、ちょっと待ちやがれ。そもそもお前、勘違いしているぞ」

「なんだと？」

土方の言葉にぴくりと眉を反応させるが、いつでも抜刀できる姿勢は変えない。

「そーですよ。僕は撫子さんを迎えに来たんですから」

「……？　どういふことだ、説明しろ」

『ええとですね、かくかくしかじかで……』

レインが今の状況の説明をする。

最初は眉を潜めて聞いていた風間だったが、しだいに機嫌が悪くなってきた様子を見せ、最後にはレインを斉藤から奪い取って廊下へとたたき付けた。ぽひつ、という間抜けな音を立ててレインが廊下に転がる。

『って……何するんですかー。痛いじゃないですかー』

「……ふん、ただの無駄足だと知って怒らずにおけるか」

『だからって、なにも僕にあたることないじゃないですかー』

「人間以外に当たらないだけ嘛だと思え。本来ならこの場全員切り捨てているぞ」

風間のその言葉は半ば本気で、実のところ土方も斉藤も少しだけ安心していった。風間とやりあうのは願ったり叶ったりだが、今はそんな状況ではないのだから。

「興が冷めた。天霧、帰るぞ」

「はい」

そう言つて、レインをさらに踏みつけて風間と天霧は去って行つてしまった。風間が舞台から去ってくれると非常に話を進めやすいので助かる。

『っていうか、なんで僕こんな可哀想な役回りなんですかー？』

顔（？）に足跡がくつきり残ったレインが恨みがましそうにそう言つた。

「ボクにもわかりませんよ。というか、ボクの方が可哀想な役回りだと思うんですけど。せつかくコトが解決すると思つたのに、さらに働かなきゃいけないんですか？　厚生労働省に訴えますよ」

『僕だつて訴えたいですよー。残業代出るんですかねー』

「……初めて聞いたぞ、そんな言葉」

残業代・厚生労働省どころか、一日24時間仕事をしている土方が青筋を立てて呟いた。

もし自分の所の隊士が言っていたら切腹ものかもしれない。

「とにかく副長、いったん屯所に帰って情報を集めましょう。山崎くんにはこのまま調査に出てもらいます」

斉藤がそつと廊下に投げ出されたレインを手に取り、汚れを拭きとつてそう言った。その手つきは優しい。きつと内心「雪村が見たら喜びそうだな……」と考えているのだろう。

「……そうだな。おい、その珍妙な人形をよこせ。俺はそいつとちよつと話があるから先行つてろ」

『珍妙な人形とは失礼ですねー』

「というか、ボクはどうすれば良いんですか？ このクーデレさんと一緒に歩かなきゃいけないんですか？」

ビショップが斉藤をちらりと見て不満げな声を上げた。斉藤も同じなようで、ジト目でビショップを見つめる。

「帰つてろ」

『仲良くお願いしますねー』

上司には逆らえないようで、しゅしゅ二人は半径1メートルは開けて歩いていった。

その最中、斉藤が抜刀したりビショップが拳をたたき込もうとしたりなどの乱闘があつたのは言うまでもない。なおかつ二人の口は身体以上に動いていたようだ。

ところで、こちらでも忘れられていたが、裏口に回っていたはずの原田と近藤が帰つてこない。どこへ行ったのだろうか。

第一四幕「すれ違い」（後書き）

上司の力は絶大。二人ともいじられキャラだと思うんです。

それと「薄桜鬼幕末無双録」発売決定おめでとうございます！アクションゲームだとか。嬉しいですね！。

それと、PV数とユニーク数を見て自分が思っている以上に需要があることに気が付いて驚いています。ありがとうございます！

第一五幕「副長の苦勞は続くよどこまでも」(前書き)

結構核心に迫るネタバレあり。

第一五幕「副長の苦勞は続くよどこまでも」

斉藤とビシヨップが行ったことを確かめて、土方は手のひらにのせた人形に問う。

「……おい、洗いざらい吐いてもらおうじゃねえか」

その声は低く、冷たい。常人が聞いたら腰を抜かして懇願するぐらゐの殺気をみなぎらせているはずなのだが、珍妙な人形はなんてことのない声色で話し出す。

「えー、どういうことですかー？」

「とぼけるんじゃない。あのガキがどうしていきなり成長した？ あつち（・・・）では今、何が起きている？」

全部知っているのだろう、という視線を込める。

今まで人形が言ってきた発言、態度。全てを総合して土方はこの人形が事件の概要全てを知っていると判断した。

人形は沈黙した。しばらく、その場には空気と木々が騒ぐ音だけが響く。やがて、面白そうに人形はゆつくりと言った。

「まあ……ボクが使命されたあたりでわかつてはいたんですけどねー。でも、一つだけ約束して欲しいんですよ」

「なんだ」

「このことは、撫子くん含めて他の人には内緒にして欲しいんですよー。あ、ビシヨップは抜きますよ。……計画が無駄になつてしまいますから」

「……何か事情があるみたいだな」

「ええ。そうなんですよー。それさえ約束してもらえないとボク、上司に怒られてしまうんですよー」

「へえ……それはご苦勞なこつて」

微笑して土方は了承の意を伝える。この人形の上司、ということはこの事件を巻き起こした犯人と考えて間違いないだろう。その犯

人は思いも寄らない自体に慌てて自体を収集するために動いている、ということも。

人形の軽い調子の声は変わっていなかったが、その声に少しだけ真剣みを帯びた色を出す。

『撫子くんのあの姿はですねー、あの子の10年後の世界の身体なんですよ。』

量子変化で……って言うてもわかりませんよね。結論だけ言うと、子どもの撫子くんの身体は今、本来あるべき世界へと戻っています。』

「……それは突然ぶっ飛んだ話だな」

『夢を通じて、撫子くんは大人の身体の自分と同調してしまった。この時点では、子どもの身体はまだこの世界にありました。』

千鶴さんと入れ替わりになってしまったはずの撫子くんは、10年後の世界に拒否されて再びこちらへと弾かれてしまった。撫子くんは同調していた大人の身体を引き連れて、再びこちらへと戻ってしまったんですよ。10年後の世界と、彼女が元いた世界は同じくりになっているみたいで、同じ世界に撫子くんと千鶴さんはいはいけないみたいだったんです。

で、その撫子くんがはじかれてしまった空間に千鶴さんが飛ばされてしまい、千鶴さんがいた空間には撫子くんの子どもの身体が行ってしまった……と。

今の状況を説明するならそんなところですよー』

「……頭が痛くなる説明だな」

あまりにも常識を越えた話で、土方は片手を額に乗せた。人形もそれがわかっていているようなので『一言で言うと、撫子くんの身体は10年後の世界の身体。千鶴さんは、撫子くんがいた世界の10年後に飛ばされています』と説明した。

『さらに千鶴さんはあちらの世界の事情に巻き込まれてしまって、今すぐ世界を移動できる状態ではないんですよー。今のボクと撫子くんみたいに、ですね。』

ビショップが手伝いにかけて、先に世界移動を出来る状態に

する手はずだっただんですけどー……」

で、今の状態である。

「……ずいぶん面倒なことになってるじゃねえか」

『ボクたちもまさか彼女の量子変化がこんな形で影響してしまうなんて思ってもいませんでしたからねー』

いささか疲れた調子で人形は言う。

「どうしてそんな面倒なことになるほど面倒なことをしているお前らの目的は……聞かねえ方が良いか」

『はいー、そうですねー。まあ、一言で言えば一途な恋、のためでしょうか』

「迷惑な恋もあつたもんだな」

それに、と土方はつけたす。

「お前らの世界の事情を知ってもどうにかする気はねえしな」

『おやおや……それはどうしてですー？ あの状態の世界を見ても、そう言えるんでしょうかねー？』

「俺は今の自分の世界で手一杯なんだよ。他のやつらの事情にかまけてられるか」

簡単な理由に人形は声を上げて笑う。

『ははー、なるほどですねー。あなたはなかなかわかっていらつしやるようで』

「褒めてはねえな、それは」

呆れたように土方はため息をつく。

「とにかく、そっちの事情が治ままでにガキを取り戻せば良いか」

土方は自分のやるべきことを理解して、屯所に戻ろうと決めたが、突然人形が言いだした。

『ああ、それともう一つですねー……』

人形がそう言いかけたとき、どういうわけか人形からガシャーという不思議な音が鳴り、どういうわけか人形から『ご用改めである、新撰組局長近藤勇だ！』という覇気のある聞いたことのある声が聞こえた来た。

『え……ちょ、何勝手に入ってきているんですかー』ここに西園寺しずくという女性が軟禁されていると聞き、はせ参じた！』って、ボク戦闘力ゼロなんですよー』む、そこにいるのはトシか！ と思った、そのような狭い箱に入って！』ちよつとちよつとーっ！ ここ、セキュリティレベル高いんですよー。アワーは何やってるんですかー』む？ 廊下にいたやつらなら倒したが』って、ええええー』

「……………」
手のひらで繰り広げられる激闘、二つの声。

聞いたことのある、というかよく知っている声に土方は凍り付いた。

これは、どういふことなのだろうか。

土方の片頬がびくびくと痙攣する。

「おい……どういふことだ……っ！」

怒りを込めた瞳で見つめ、ふるふると震える手の中の人形に問いかける。

『ええと、ですねー…………』

人形は聞いたことのある声に負けじと声を張り上げる。気まずそうな声色で、とんでもない発言をした。

『あなたたちの世界にいる方々も、こちらのどんちゃん騒ぎで何人か来てしまったんですよねー。……撫子くんから見た、10年後の世界。千鶴さんと、ボクがいるこの世界に』

「……………」

土方のこめかみからピシッ、と何かが切れた音がした。

『おお、トシ！ そんな箱にいないでこちらに来て手伝ってくれ！ 正宗殿という人物に会ってだな、彼の奥方がここに捕らわれていると聞いて助けに来たのだ。いやあ、正宗殿はなかなか面白い人物ですぐに気が合つてな。ここは新撰組局長として手助けをしたいと思います……トシ？』

どう考えても聞いたことのある声。慣れ親しんだ声。

「近藤さん……………」

土方はその名を呼んだ。というか、最初に名乗っていた。

『なんだ、トシ？　というか、突然こんな荒れ地の土地に来てしまったのだが……ここはどこだ。空の色もどこかおかしい。京ではないようだ……』

うーん、と手のひらの人形から近藤の声が聞こえてくる。

「近藤さん……ちょっと待ってる……。すぐに、迎えに行く……」

この燃えたぎる苛立ちはどこへぶつければ良いのだろうか。今すぐはこの人形を火の中に放り込んで、灰にしてやりたい衝動を堪えて土方はようやくそれだけ言った。

「おい、人形」

『あー……はいはいー』

何を言いたいのか人形もわかつているようで、若干居心地が悪そうな声を上げる。

「俺を、そつちの世界に連れて行け」

もう面倒だ。自分がとつと片づけるしかない。

そう思い、土方は手のひらの人形にそう告げた。

第一五幕「副長の苦勞は続くよどこまでも」(後書き)

近藤さんが良い味出してくれています。

それと、レインの説明でわからないところがあったらごめんなさい。

第一六幕「女装男装。男言葉女言葉」(前書き)

ネタバレありーです。

第一六幕「女装男装。男言葉女言葉」

撫子と薫が新撰組屯所に向かうと、そこには沖田はいなかった。

「……なんだよ、沖田いないの？」

屯所内へ侵入し屯所見回りの隊士の目をかいくぐりながら沖田の部屋や、彼がいそうな場所を巡っても彼の姿はなかった。

「ちっ……ムシャクシャする」

予想が外れて薫が他の隊士を切り捨てようと、屯所の隊士の寢床路へ侵入しようとしたとき、ある人物に会った。

「……あなた、どなたかしら。みたことない顔ね？ 永倉さんが突然消えて、仕方がなく帰ってきたらお客様とは。こんな夜中にむさくるしい男共しかいないここになんの用かしら？」

薫の殺気に気づいたのだろう。そう声をかけられたときには彼はすでに抜刀しており、一瞬の隙もない構えを取っていた。その覇気に、皮膚がぴりぴりとする。それだけで撫子は彼がただならぬ刀の使い手だと、わかった。

（というか、どうして女の子口調なの！？）

長い髪、長いまつげ。美しい女性の口調。だけれども、そこにいたのは立派な袴を着た男性であった。

「伊東甲子太郎か……」

薫は布を深くかぶり、面白そうにそう呟いた。その腰に下げられている刀をすらりと抜き、構える。

「わかつてはいたけど、私も有名ね。」

……女の子なのにその気配、構え……ただものじゃないわね。それに、そこにいる方はお仲間……なのかしら？」

視線は撫子の方に向けられた。撫子は必死に首を横に振ったが、疑いの目は晴れない。

「……いいわ。とりあえず、手強そうなのはこっちの子だけみたいだから相手してあげる。新撰組参謀である、この伊東甲子太郎が……」

…ね！」

そう言うや刹那、ざっ……と土を蹴る音が聞こえた。次の瞬間には、刀が交わる高い音が響き、薫と伊東は弾かれるように後ろへと後退していた。

（な……なに……！？　今、何が起きたの！？）

撫子の目には、伊東が消えたとともに薫と伊東が立っている位置がずれた姿しかとらえることが出来なかった。

「あら、ずいぶんと良い動きね。先ほどの一撃、この伊東、最高の速度でお見舞いしていたのに」

「それが、最高？　笑わせるね。俺がお前程度の一撃、捕らえられないとでも思ったの？」

そう言い、二人は笑う。だけれども、緊張は解かれない。一瞬でも隙を見せたら、一撃をたたき込まれることは二人とも予測しているのだ。

男の姿なのに、女性の口調。女の姿なのに、男性の口調。どこか違和感を覚える組み合わせの二人の激闘を、撫子はただ頬に汗を流して見守っているしかなかった。

この伊東という人物は新撰組の人間らしい。参謀、という言葉の意味はいまいちわからなかったが、確実にその自信に満ちた口調と態度。平隊士なのではない。高い地位にいる人間なのかもしれない。それなら何故撫子が一番始めに案内されたあの場には、彼の姿はなかったのだろうか。

この人物、新撰組の人間だけれども撫子の味方ではないかもしれない。

（なら、知っている人を探さないと……）

土方でも沖田でも、自分のことを知っている人間がいれば助かる可能性は今よりずっと高くなる。だけれども、あたりを見回しても人一人通らない。

（……困ったわね）

二人が乱闘している最中、もしかしたら隙をついて逃げることは

可能かもしれない。そのチャンスと同じぐらいに、二人に斬られる確率も高いが。戦いの素人である撫子には分が悪い。

どうせなら二人とも共倒れしてくれれば助かるのだが……。

目の前の二人はいまだ激しい戦いを繰り返している。刀が月の光を反射しており、引かれては弾かれ、ということを繰り返している。「本当に、あなた何者なのかしら？」

「はっ！ オカマ程度に教えてやるものか。オカマはオカマらしく、沖田にでも言い寄っていなよ。沖田とできちゃったなんて話を聞いたときのあの子の顔とか見てみたいし」

「沖田？ 顔は好みだけど近藤主義だから好きじゃないのよね。あなたもその布を取ってくれば、場合によって女の子でも相手してあげるわよ？」

突っ込むべきところが激しく間違っている気がする。というか、薫は沖田が嫌いなのだろうか。いや、絶対嫌いだろう。というか、近藤派でなければ言い寄っていたのかと、撫子は自分の知らない未知の世界があることを悟ってしまった。

磁石のプラスとマイナスが瞬時に入れ替わるみたいに引かれあい、弾かれる二人。

だが、それもすぐに終わる。ひときわ高い金属音が鳴り響き、鈍い低い音が聞こえてきた。空に舞うは、赤い滴。

「ふふ……利き腕が斬られたら、まともに刀なんて握れないわよね？」

伊東の刀からポタポタと血がしたたり落ちる。刀を真っ直ぐに伸ばし、薫へと切っ先を向けている。

薫は右腕を斬られたようで、聞き手をだらりと下げている。刀は左手に持ち替えられており、もしかしたら神経ごと斬られてしまっているのかもしれない。

その生々しい光景に、撫子は口を手で覆った。喉の奥から酸っぱいものがこみ上げてくる。いやだ、これは、気持ち悪い。

そこまでの深手を負わされているのに、薫は焦った表情を見せて

はいなかった。むしろ、余裕に満ちた笑みを浮かべ笑いながら言う。
「ふふ……はははははっ！ それはどうか？」

高い声。伊東は薫が気が狂ったのかとも思ったのか、眉を潜める。

「……それは、どういうことかしら？ 手応えはあったわ。誰かのようにもう二度と刀を握られなくなるぐらいに……ね」

誰か、という言葉で僅かに伊東は笑んだ。撫子は事情を知らなかったからその意味はわからなかったが、事情を知るものが聞いたら怒り狂っていたかもしれない。

「……笑っている暇は、ないよ……！」

「……ちや、と薫は刀を構えた。

……利き腕である右腕で。

「……なっ！？」

伊東が驚愕の表情を浮かべた瞬間、薫が地を蹴った。

またぐしゅ、という生々しい音が聞こえた。

「へえ……今のかわすなんて、なかなかやるね」

薫が余裕の表情を浮かべる。それに対して伊東の顔からは余裕が消えていた。右肩の布は真一文の刀傷があり、そこからは血がにじんでいる。深い怪我ではないが、気にしないほど浅い怪我ではないのは撫子の目から見てもわかった。

「……そんな、確かにさっき、この手で斬ったはずなのに……！？」

化け物を見る目つきで、薫を見つめる。

「そ……んな」

撫子も、伊東と同じくこの光景が信じられなかった。

確かに彼女の腕には先ほど負ったはずの怪我があった。それは斬られた着物が証明している。仮に怪我を負っていたままだとしても、あんなに俊敏な動きができるはずがない。

薫は布を深くかぶっているため、顔は見えない。だが、最初に出たときに見た金色の瞳だけが暗い中、やけに光を発しているように見えた。

（なんなのよ……これ！？）

得体の知れない恐怖で、無意識に後ろへと一歩下がる。

背筋に冷たい汗がつたい、足が震える。

後ろの茂みから、かさ……という草が揺れる音がして、突然腕を捕まれた。それは力強く、優しい力。そのがっしりとした腕から、男性の腕なのだとわかった。

「え……！？」

気が付くと撫子はその腕の主につっ張られ、その茂みの中へと入って行っていた。

その先には土塀があつたはずなのに、それをするりと通り抜けて道へと尻餅をついていた。

「……待て！」

少し離れたところに、薫の声が聞こえた。だが、追跡をされる前に伊東の一撃があつたのだらう。すぐに高い金属音が響き、打ち合いが始まる。

「……………」

そこにいたのは、この時代では珍しく永倉のように髪が短く、腰に刀を差した青年。刀、と言っても撫子が会った他の人物達のように脇差しは指していない。古びた刀が一本、差されているだけだ。腰にぶら下げられた紐には、古びてはいるが立派な印籠が下がっている。未だ腕は掴まれたままで、青年に気を遣うように引っ張り上げられる。

「あなたは……？」

あの緊迫した状態から逃げられたという安心感と、突然自分と助けた青年に対する疑問を含めた声でおずおずと訪ねる。

青年は静かに首を振った。厳しい目で先を見て、強い力でまた腕を引っ張られる。

今は、そんなことを聞いている状態ではないということか。そう考え、導かれる方向へと足を進める。

（でも、一言ぐらい何か言うべきなんじゃないのかしら）

敵でも味方でも、脅すなら一言撫子を黙らせるために。味方なら安心させるような言葉をかけるものではないだろうか。

不満をあらわにし、きつ、と青年を見上げるとあることに気が付いた。

「あ……」

青年の喉には、酷く醜い刀の傷がつけられていることに。

「しゃべれない……のね」

青年にそう言うと、以外と愛嬌のある笑みを浮かべて青年は苦笑した。

どうして自分を助けてくれるのかはわからなかったし、畏かもしれないとは思っていたが、なんとなく撫子はその青年の笑顔に安心感を覚えた。

素直じゃない、でも優くて面倒見の良い、理一郎のような笑みを浮かべるその青年に。

第一六幕「女装男装。男言葉女言葉」(後書き)

薫VS伊東さん。夢の共演？

今回わりとシリアス気味で。戦闘ありーので。

黎明録ネタもありで。

そして、お盆なので更新遅いです。

第一七幕「合流、そして分担」(前書き)

ネタバレあります。

第一七幕「合流、そして分担」

「あれ、一君じゃない。その隣の白いもふもふした人は誰？」

「……総司か。お前こそ、隣の珍妙な男は誰だ」

「あれ、ナイト君じゃないですか。どーしてあなたがここにいます？」

「……お前っ！？ どうしてここに……！」

斉藤・ビショップと沖田・理一郎は偶然にも道中鉢合わせをした。お互いを見た彼らのリアクションはそれぞれで、それでいて誰も同じだった。

「というか、君たち知り合い？」

理一郎とビショップを交互に見やり、微妙にピリピリとした敵意を放っている二人を面白そうに見やって沖田が言った。

「ボクはお仕事ですよ。お仕事。あなたみたいなフリーターとは違うんですから」

「フリーター言うな。俺はたまたまお前らの騒ぎに巻き込まれたただけだ」

そう言ったビショップの声を聞いて沖田が首をかしげる。疑問に思ったことを言おうとしたようで斉藤に目を向けると、不機嫌そうな顔をしてそっぽを向かれてしまう。

「……総司、そのことには触れるな。そんな時間もあるまい」

「うわー、明らかに触れて欲しくない話題っぽい反応。一君のそんな態度珍しいね」

口の端をニヤニヤ歪ませて、言つと斉藤はさらに眉を寄せてそれきり黙り込んでしまう。

「ボクとしては、政府に逆らったあなたを放っておくわけにはいかなんですけどね」

「……ちっ」

二人が構えを取るのを見て、沖田が腰の刀に手をかけながら理一

郎に問う。

「え、なに？ 君、この人と敵対でもしているの？」

「……そんなところだ」

「敵対、というか裏切り者と呼んだ方がしっくりですね。せつかくナイトの地位まであげたのに、とんだ厄介者ですよ」

明らかに緊張している様子の理一郎に、余裕の態度を見せるが隙のないビシopp。はたから見ても実力差は歴然である。

「へー、そんな育ちの良さそうな顔してなかなかやるね、君。実力差があるって面白くないから、加勢してあげようか？」

「総司、素直に関心している場合じゃないだろう。それに、今この男に始末されてはこちらとしても不利益だ」

斉藤の静かな言葉に沖田は首を傾げる。

「どういうこと？ もしかして、千鶴ちゃんに関係することとか？」

察しの良い沖田にビシoppが答える。

「そーですよ。だから警戒解いてもえませんか？ ボクは可哀想な女の子のためにこうやって休日返上で働きに出て来ているだけですし」

「……信用できるか」

理一郎の言葉にビシoppは飄々と「じゃあ、信じなくて良いですけど仕事の邪魔はしないでください。それと、ボクが動いているのはただたんに撫子さんがここにいと政府にとって不利益だからそれだけです」

実はCLOCK ZEROの地下に撫子の身体があったとか、実は政府のボスが理一郎のよく知っている人物とかそういうネタバレは一切しなかった。物語上、いろいろと困るからだ。理一郎も、この話を作った絶対的な力の前にネタバレを知ることが許されなかったようで疑問に思うことなく、ビシoppの言葉に頷いた。頷いてしまった。

「千鶴を連れ戻すためにも、こいつの協力が必要だ。不本意だが、な」

「うーん、それじゃあ仕方ないね。というかさ、君たちがここにいらってことは撫子ちゃん取り戻すの失敗したの？」

沖田のずばりな言葉に、斉藤もビシヨップも答えなかった。だが沖田にとつてその沈黙は肯定と同じで、一層口の端を歪ませて笑う。「あつははは。駄目じゃない、それで、土方さんはどこ行つたの？」

「……副長なら、後で合流する。じきに来るだろう」

「なーんだ。ばつさりやられてくれても良かったんだけど。それに、僕がここにいるのがバレたらきつとうるさいしなあ」

「つて言つてる間に、誰か来たぞ」

理一郎の言葉に、全員がその方向を向く。暗い夜道に、人影が見えた。

「なんだ、お前ら。こんなところで道草食いやがつて」

「土方さん、なんですか？ それ。なかなか滑稽でお似合いですけど」

その手にはレインが乗っており、その目から光が放たれていた。少し怖い。

『この世界の夜は明かりが少ないですからねー。電灯機能ですー』

「なかなかこの“でんき”ってやつは便利だぞ。斉藤、お前も使ってみるか？」

「……遠慮させて頂きます、副長」

ハイカラな土方は素直に感動していたが、斉藤は見慣れぬ光に対して一歩下がった。

「どうして屯所待機の総司がここにいらるとか、そつちのおかしな男は誰かとか聞きてえことはたくさんあるが……今はそんな状態じゃねえ。おい、その白髪」

土方はビシヨップに視線を向ける。ビシヨップはニヤニヤしてレインと土方を見て答える。

「失礼ですね、これは銀髪って言んですけど。で、なんですか？」
「それでだ」

そこまで言ったところで、屯所の方から黒い影が近づいてきた。

「……副長！」

黒い忍者姿の男。山崎だった。

頬には汗が流れ、その声もせつば詰まっていた。土方は言いかけていた言葉を止め、山崎の方へと向く。

「さらわれた、撫子くんの行方がわかりました！ それと屯所では謎の襲撃により伊東参謀が戦闘を行い、血の臭いにあてられた羅刹が脱走を……！」

「……なんだと！？」

山崎の言葉に、土方・沖田・斉藤は目を見開いた。

他の者はその意味がわからなかったが、最後の言葉よりも最初の言葉に反応を示す。

「……撫子が！？ 今、あいつはどこにいるんだ！」

理一郎は山崎に詰め寄り、鬼気迫る表情で問う。

「それより、羅刹を早く捕まえないといけないんじゃない？ 伊東さんにも見つかったら困るし」

沖田の態度はいつもとあまり変わらなかったが、声が真剣みを帯びている。それほどまでに重要なことなのだ。

『はー、何か大変なことが起きているみたいですねー。ボクたちとしては、撫子くんの方が重要なんですけどねー』

レインがそう含みを持たせた声で言う。その声の先は、土方。

土方は腕を組み、目を伏せていた。全員の視線が土方に集まる中、その紫の双眸がゆつくりと開かれる。その目には、迷いはなかった。「総司、お前はあのガキの搜索。斉藤、お前は脱走した羅刹の対処。山崎は、伊東に対してこの自体を隠すための裏工作をしろ」

その凜とした声に、土方をよく知るものたちはそれぞれの反応を見せる。

「仕方ないなあ、千鶴ちゃんのためだし、協力してあげようかな」

「……御意」

「わかりました、お任せください」

だけれども、それぞれ自信に満ちあふれたしつかりとした返答。
斉藤は返事をするやいなや、その場を音もなく去り、遠くから砂
を蹴る音が響き渡る。

「撫子くんは、俺の知り合いと、彼女の友人と一緒にいる」

山崎の言葉に、理一郎が一步前に出た。

「俺も……俺も、一緒に連れて行つてはくれないか？」

「……いいよ、でも足手まといにはならないでね」

面白そうに笑つて了承する沖田に、山崎が場所の説明をする。沖
田は頷き、理一郎を一瞥する。彼も頷き、衣服の裾を大幅に揺らし
て暗い夜道の中を駆けた。

その場には、土方・レイン・ビショップが残された。

ビショップも自分の役割をわかっているのか、服のポケットから
あるものを取り出す。その手に握られていたのは、赤く光る宝石。
月明かりに照らされたそれは、より一層深い赤の色と輝きを出して
いた。

『これは、世界を移動するための道具です。撫子くんがあつちから
こつちに渡つた際に、あちらの世界に置き去りにされていたもので
す。あなたには、これをボクのいる世界にいる千鶴さんに届けて欲
しいんですよ』

「ホントなら、ボクがこれを撫子さんに届ける予定だったんですけ
どね」

『世界の移動には、同じものをもう一つ必要とします。』

それを千鶴さんにキングが届けてくれる予定だったんですけど、
邪魔が入ってしまったってどうにも届けられる状態じゃないん
ですよ』

ビショップの手から土方の手へとそれが渡される。土方は神妙な
顔で、それを黙って見つめる。

『だから、あなたが千鶴さんにそれを届けてください。代わりにキ
ングをこちらの世界へと移動させ、撫子くんに渡します』

「……まあ、まだ撫子さんと会つちゃいけませんから、キングには

持つてきてすぐに帰ってもらう方がボクとしては楽なんですけどね」
『それはちよつと困りますねー。その扱いがわかつているのはボクとキングだけですしー。あ、ちなみにボクがいなくても撫子くんは世界を移動できますから、ボクを置いていってももらっても大丈夫ですよー』

ウサギさんのキーホルダースペアはまだありますしー、と序盤に言った嘘をさらりとウサギが暴露しても、土方はさして動揺を見せなかった。そんなものは予想していたとばかりに、ふん、と言ってレインとビショップを睨みつける。

「これをあいつに届けるのは良いが、近藤さんたちはどうやって連れ帰るんだ？」

「あ、それは……これです」

ビショップが、トランシーバーのような機械を取り出して土方に差し出す。

「……なんだ、この鉄屑は」

眉を潜めて、そう言うつとビショップが「失礼ですね、転送装置です」と言った。

『もう座標の選択はしてあるので、そのボタンを押すだけで世界を移動することができます。帰るときは、千鶴さんの転送の際に一緒にくっついていけば大丈夫ですよー』

「……とにかく、ここを押せば良いんだな」

慣れない手つきでずっしりと重量感のあるそれを持ち、恐る恐る機械に触れる。

「ボクは、キングに付いて帰りますからご心配はしないで下さい。どうせ戦力になりませんし、それぐらいは役に立ってもらわないと」
「上司に対する言葉とは思えねえな、それは」

土方がビショップの言葉に苦笑し、レインをビショップの手の中に置く。

「……ここで、良いんだな」

「はい、そこです」

「……ここだな」

「そーですって」

何度も何度も押すボタンの位置を確認して、ふう、と一息ついて土方は機械のボタンへと触れる。

「……………」

土方の身体を強い白い光が包み、眩しそうに腕を目元に掲げた。そうして一瞬で土方の姿は虚空へと消え、ビショップとレインがその場へと残る。

『行っちゃいましたねー』

「行っちゃいましたね」

土方の消えた空間を見つめて、ビショップの細い目がさらに狭められた。ふと空を見ると、月の光がとても輝かしくビショップの身体を包み込む。その暖かく、柔らかい感覚に彼の唇が少しだけ緩められた。

「……まあ、大丈夫でしょう。キングよりしっかりしてそーですし」
『そうですねー』

「あ、それとナイト君がこっちの世界に来ているんですけど。鷹斗さん、会っちゃ駄目なんじゃないですか？」

『あ』

しまった、とばかりに短い声を上げるレインにビショップが頭を抱える。

「……残業代、しっかり請求させてもらいますからね」

そう不満を零すビショップの前に、再び明るく白い光が現れる。そこにいたのは、土方はない。

「待ってましたよ、キング」

金色の柔らかい髪を揺らし、淡く頬笑みを浮かべるその男性。

「……行くよ、ビショップ」

「キングのおうせのままに」

赤い瞳を細め、彼は歩む。そのあとを、ビショップが追う。

「撫子を取り戻しに」

この人戦力として全く役に立たないとか、わりとコトの元凶の張本人だとか、かつこつけて美味しいところどりするつもりなのか、そんなことは考えてはいけない。

暗い京の道を、二つの影が進む。

さきほどまで晴れていた空に、いつのまにか厚い雲がかかって月の光を遮っていた。

第一七幕「合流、そして分担」(後書き)

鷹斗「この間、テレビで『子どもに聞かれて大人が解答に困る質問』って特集やっていたんだ」

撫子「確かに、返答に困る質問ってあるわよね」

鷹斗「うん、だからTVに『シュレーディンガーの猫の、波動関数で決まる値 (存在確率) は、いったい何を意味するんですか

？』って問い合わせたら、誰も答えてくれなかったんだ。やっぱり、答えにくい質問だったんだね」

撫子「それ以前に、大人でもその質問はわからないわよ……」

本当の鷹斗なら、きっとわかってるんだろうなあ……。

第一八幕「楓の大冒険」(前書き)

ネタバレあり。

第一八幕「楓の大冒険」

「……ここ、どこだ？」

風はさわさわと涼しげに吹いていて、草を揺らし頬を撫でる。手を伸ばせば届くんじやないかと思うぐらい、大きい大きい満月。鼻孔をくすぐるは、草の匂い花の匂い風の……匂い。

あの壊れた世界では到底あり得ない、景色。

着物を着くずした格好をした青年、楓が見知らぬ景色を見てそう呆然と呟いた。

「若も殿先生もなんか知らないヤツらと戦ったり仲良くしたりするし、長だつて知らないおっさんと話なんてしてるし……意味わかんね」

目の前にあるのは、楓が先ほどいた場所ではなかった。そこは、日本風の建物。母屋の廊下であった。自分の足も、靴を履いたままだったがその廊下の上に乗っている。

感覚としたら、有心会のアジトのような雰囲気でもあるが、もつと古い匂い感じもある。

楓は、元の世界で政府と乱闘を繰り広げていた。その間、有心会のメンバーの一人である、楓が殿先生と慕う人物が服の裾に自らの足を引っかけ、その手に持っていたものを楓に向かって放り投げてしまった。

その瞬間、目を開けることができないほどまばゆい光が楓を包み込み、気が付いたらここにいたということである。

もしも、有心会の幹部クラスであったのなら殿先生が持っていたのは時空移動装置で、自分が元いた場所とは違うことをすぐにでも察知できたであろう。だが、楓は有心会では下っ端の下っ端で任務ではよくドジをやつて叱られている。とうていそんな情報なんて与えてもらえないことなく今まで来ていたので、楓は自分の置かれてい

るこの状況が全くと言って良いほどわかってはいなかった。

当たりを見回してみても、誰もいない。楓は深いため息をついて、頭をかかえる。

楓が今いるのは、新撰組の屯所内であった。

しかも、千鶴の部屋の前であり、そこは主に新撰組の幹部達が使っている場所でもあった。今現在、幹部全員が出払っているので人は全くなかった。

その場にしゃがみこんで、肺の中の空気がなくなるぐらいため息をついていると遠くから金属音のようなものが聞こえてくる。

「……もしかして、若かも！」

楓の上司は普段、大ぶりのナイフを使って戦っている。もしかしてその音なのではないかと思い、楓はすぐに立ち上がって音のする方へと急ぎ足で向かう。

廊下を駆け、地面に足を降ろす。音のする方を見ると、そこは漆黒の世界だった。そこは木々が他よりも生い茂っていて、月の光が届いてはいなかったのだ。楓のいた壊れた世界でも夜に光りというものは少なく、夜目は利く方だったがそれよりもここは暗い。

「……っと、明かりなきや駄目だな」

そう思い、適当な部屋に入れば行灯ぐらいあるだろうと思って道を引き返す。

音のする方へ向かってても若がないかもしれないとか、ここは明らかに他人の家でこれは不法侵入に値するとかそんなことは楓の頭には全くなかった。

歩いていると、薄暗く明かりがついている部屋を見つけた。ゆらゆらと揺れる障子越しに、何人もの人間が集まっているのが見える。大勢が集まっているはずなのに、そこからは絹音一つ聞こえない。

「……なんか、まずいかも」

その雰囲気知らずに頬から汗が流れた。ごくりとツバを飲み込んで、忍び足でその場から立ち去ろうと息を殺す。

だが、遅かった。

明かりがついていた障子から、するりと軽い音がした。戸が開いたのだと、楓は直感的に悟る。

「……………!？」

「おや……君は、誰ですか？」

柔らかい声をかけられ、まるで機械のようにぎこちなくその方向へ首を傾けると人の良さそうな丸い眼鏡をした男が笑顔で楓を見つめていた。

「薩長の者……にしては少々お間抜けですね。しかし、私を……いえ、私たちを見られたからには生かしてはおけませんね」

先ほどの変わらない笑顔のまま、その男はすらりと腰に下げていて刀を抜いた。楓の頭から、血の気が引いた。

「ちょ……ちよちよちよ！ 待てよ！ オレは別に怪しいもんじゃ……………っ！」

両手で降参のポーズをして、なんとか話を取り付けようとするが、刀を抜いた男は少しも動じることなく足を一步一步と進めてくる。

「そういうことを言う人は、大抵怪しいんですよ。それに、ちよちよと良い……………」

その言葉に、楓はさらに嫌な予感がした。

明かりのついた部屋には複数人も人間がいるはずなのに、誰一人出てきてはいない。そのことに気づいたのだ。

「ちょ……ちよちよと良いって……………」

恐る恐る訪ねてみると、男は片手を上げた。そうすると、彼の後ろからぞろぞろと大勢の男達が現れた。その全員の髪は白く、目は赤い。それすら異常な光景だと言うのに、その全員が刀を抜いていたのだ。

「ええと……その……………」

果てしなく嫌な予感を感じた。表情は固まったままで、でも視線は様々な方向を飛び回る。

「……みなさん、この者の血を飲みますよ……………」

「……………ひっ！」

そう言った男の髪は、徐々に白く染まり、目は赤くなる。

鳥肌が立ち、心臓は突然氷に当てられたかのように跳ね上がる。冷や汗がだらだらと全身の穴という穴から出てくるのを感じた。

「お……オレは本当にただ、その……迷っただけで……っ！」

楓のその言葉も虚しく、低く冷淡な声が夜空に響いた。

「……行きなさい、羅刹たち」

それを合図に、彼の後ろにいた男達が走り出す。

「ひい
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
つ
！」

楓は生存本能に従い、明かりのない中を全力で駆けた。……さきほどの、音がする方へと。

「なんでなんでだ!?　なんでオレ、こんなことになつてんの!?　殿先生ルートではかなり活躍だったじゃん!　なんでこんな扱いなんだよ!?　助けて、若あああつ!」

もはや半べそで、滅茶苦茶に楓は走った。

楓がこれまで生き延びてきたのは、その逃げの足にあったかもし
れない。あくまでも作者の予想だが。それと、作者は楓が大好きだ。
決して嫌いではない。

転びそうになっても、息が切れてもただ無茶苦茶に楓は走った。

楓の信頼する上司がいると信じる場所へ。

「若あ ああああ あああつ！！」

「うわっ！」

茂みをかきわけ、戦闘音が続く方へと楓は突進し、その人間を正面から押し倒した。どう考えても無茶苦茶な行為だったが、てんぱっている人間にそんな常識は通用しない。

「……って、あれ？」

楓の下には、少女がいた。

桃色の着物に、大太刀を持った人間。その大太刀は手には握られていたが、地面に投げ出されている状態ではあったが。

その顔に、楓は見覚えがあった。

「……………っ」

「お前……確か、若と殿先生と一緒にいた……」

愛らしい顔立ちに、凜とした瞳、黒い髪。謎の光に包まれる前に目にした、名も知らない男性に、とてもその顔は良く似ていた。そばには、先ほど顔にかけていたであろう布が放り出されている。

「お前、女だったのか……!？」

「それより、早くどけろ！ 邪魔なんだよっ！」

「というか、お前、若はどうしたんだよっ！」

「若？ 誰、それ！ 知らないよ！ それより、早くどけろって！」

楓は自分の話を聞かない少女に苛立ちを覚えつつも、そのせっぱ詰まった声に首を傾げた。ふいに照らされていた月の光が途切れ、影が差した。疑問に思い、後ろを振り返ると……。

「……なんだかわからないけど、終わりね」

極上の笑顔で、オカマ言葉を使っている男が刀を振り上げていた。

「え」

口を半開きにした状態のまま、楓はその笑顔を見つめていた。

次の瞬間には、もしかして自分は殺されかけていることに気が付いて、一步遅れて楓は絶叫していた。

「ええええええええええっ!？」

第一八幕「楓の大冒険」(後書き)

長いので、分割。楓可愛いよ、楓。

第一九幕「楓の大冒険その2」(前書き)

ネタバレあり

第一九幕「楓の大冒険その2」

「邪魔だっ！」

下敷きにしていた少女が無理矢理起きあがった。楓は少女の腹に乗っていたため、その勢いで思い切り地面に頭をぶつける。脳しんとを起こすぐらいの勢いで、一瞬意識を失いかけた。

楓は仰向けになった状態でそれを見ていた。

きいいいん、という先ほど聞いたような金属音と肉が裂かれる音が同時に聞こえ、赤い液体が宙を舞う。覚えのある鉄の匂いがした。

「しぶといわね……っ！」

「……そっちこそ、な！」

少女はどうしてか、オカマ男に顔が見られないように袖で顔を隠していた。片手ではあんな大男に勝てるはずがないのに、押し切られる様子も押し切る様子もなかった。ただ、刀同士が共鳴して震えているだけだった。

「どどどど……どうしようっ！」

膨れあがる双方の殺気に、震え上がる。でも、その場から動くことは出来ない。

必死で打開策を考えていると、楓が先ほど姿を現した茂みから多くの足音が聞こえてきた。

「ま……まさか……」

自分は、この場にとんでもないものを連れ込んでしまったのではないかと思った。

というか、間違いなくそうだろう。

「ちっ……、人かっ！」

少女も自分が不利なのを察したのか、焦った、苛立った声を上げる。

オカマ男は口の端を歪ませて、笑う。

「あら、年貢の納め時ね」

そうすると、今度はすぐに少女が笑った。

「それは、どうかな？」

「え？」

目を見開いた状態で、オカマ男は真っ直ぐに倒れた。少女と楓の方へ倒れる形だったが、少女が刀で避けた。オカマ男は顔から土と熱烈なキスを交わす形となる。

その後ろには、先ほどの眼鏡をかけた男。髪の色は元に戻っており、穏やかな顔で両手に鞘をつけたままの刀を握っていた。恐らく、それで殴ったのだらう。

「おやおや……今日はお客様が多いですね」

「山南、敬助か……」

未だに顔を隠したまま、低い声でつぶやいていた。その声は、風に溶け込んでしまいうらい小さくて恐らく楓にしか聞こえなかった。楓には下から少女の顔が見えており、どこか苦笑いのような表情にも思えた。

「あなたも、そこの方のお仲間ですか？ ……なら、死になさい」
眼鏡の男が手を上げ、茂みの方にいるであろう人間達に合図を送る。

「ちっ……っ！」

少女は楓を蹴り飛ばし起きあがって、眼鏡の男ではなく茂みの方へと駆け出した。

「あ……おいっ！ 置いていくなよっ！」

楓は眼鏡の男のすぐ横を転がり、鞘が入ったままの刀の切っ先を喉に向けられる。

「私が、みすみす見逃すとも？ それに、彼女は馬鹿なんでしょうかね。わざわざ、敵の中へと飛び込むとは」

「……あ……あれ……っ！」

楓は目を見開いた。指を差して、少女の方へと視線を誘う。

「……なんですか？ その程度で私の注意を逸らすつもり……」

眼鏡の男は一瞬楓の方を向いたが、目を見開いて少女の進んだ方向に注目した。

「羅刹達が……」

少女はその刀で男達を切り伏せていた。血が舞い、肉が切られる音が響く。絶叫が、聞こえる。

「こんな雑魚、オレの相手じゃないね！ それに、おもちゃを無くしたんだ。これ以上、ここにいる義理もない」

そう言って、鮮やかな刀さばきと身のこなしで消えていってしまった。

「……たかが小娘に羅刹隊が倒されるなんて、信じられませんか」眼鏡の男は啞然として呟いた。

男が羅刹、と呼んだ一人が娘の後を追おうと駆け出した。

「……追いなさい。必ず、息の根を止めるのです」

静かな口調でそう言っていると、目の前の楓に再び視線を戻した。その目はどこまでも、冷たく冷酷だった。

「さて、あなたにはここで死んでもらうことになりそうです」

「いや、待てよ！ オレ、関係ないからさ！ ただ、若と殿先生がどこにいるのか聞きたいだけだからさ！ それに、ここはどこなんだ。お前は政府の人間なのか？」

「……おかしいことを言いますね。あなたは薩長の人間でしょう？ その程度の言い訳で、みすみす見過ごすとも思っているんですか？」

「はあ！？ 言っている意味が……」

かみ合わない会話に、楓が苛立つ。そして、どう考えても彼は自分を見過ごす気なんてないことを悟る。

「それに、先ほども言いましたが……私たちを見られたからには生かしてはおけませんからね」

そう言って、ゆっくりと刀の鞘を外した。白刃の光が、ちかちかと目に入る。

「……死になさいっ！」

「う……うわああああああっ！」

その切っ先を振り下ろした。

それを止める手だてではなく、なんの意味もないとわかっているが両腕を顔の前でクロスするように抱えて絶叫する。

そのときだった。

ばちばちばちばちっ！

「……これはっ！？」

楓と眼鏡の男の間に、火花が乱入してきた。ただしくは、眼鏡の男の皮膚へと。

その音にも、驚いたが普段から爆発音を聞き慣れている楓はすぐにそれが花火の音だと理解した。代わりに男の方は聞き慣れないのか、目の前ではじける火薬の光に動揺していた。

「こっち！」

離れたところで声が聞こえて、反射的に楓はその場から逃亡しようとして腰を浮かす。

「……逃がしませんよっ！」

男が追撃をしようと、腕を振り上げるが再び花火の光が邪魔をする。

楓は走った。声がした茂みの中へと飛び込む。そこは、撫子が逃亡の際に使った壁の穴だとは知らなかった。そこをするりと通り抜け、壁の外へと転がり込む。

おもいきり頭を打ち、その痛みに耐えていると小さな手が差し伸べられた。

「大丈夫ですか？」

「あんたは……」

蜂蜜色の金髪をなびかせた少年だった。

赤い瞳は理的で、楓のいた世界ではあまりしないようなジャケ

ットにパーカー。ズボン、という格好をしている。

「とにかく、ここを離れましょう」

「あ……ああ」

自分より年下の人間に助けられたなんて恥ずかしい話で、長に知られたら殺されるなんて考えてしまったが、楓はその手を取った。すぐに後ろからさきほどの男達が追ってくる音を感じる。

「……おい、どうするんだよっ！」

「こっち！」

少年は民家の間に身をするりと忍び込ませて、楓をそこに誘う。

楓もそれに倣う。二人で入るには狭すぎたが、致し方ない。

すぐ傍に、足音が聞こえてくる。

ごくり、とツバを飲み込み、心臓が大きく早鐘を打っているのが感じられる。

「……………っ！」

再び足音が聞こえ、男の顔がすぐそばに見える。

彼がすぐに横を振り向けば、たちまち見つかる。手に汗がにじみ、漏れそうになる声を必死でかみしめ呼吸の音さえ聞こえないように息を止めた。

ほんの少し、ほんの少し彼が振り向けば自分たちの命は終わる。

ほんの数秒のことだったはずなのに、それはとても長い時間を感じられた。

男は、楓たちのすぐそばを通り過ぎて行ってしまった。

「……………ふああああ」

脱力して、安堵の息を吐く。

それは少年も同じだったようで、彼は緩く微笑んでいた。

「良かった。あっちで見かけた人だから、助けなきゃって思ったんです」

「助かった。ありがとな。……あっちってなんだ？」

少年は手にトランシーバーのような機械を取りだして、楓に見せた。

「あなたがいた世界です。あの……壊れた世界」

壊れた世界、という言葉に楓は自分のいた場所だという核心を得た。

「オレは、そこも別の世界から来たんですけど……友達を助けるために、ここまで来たんです」

「ちよつと待った。じゃあ何か？　ここは、オレのいた世界じゃないってことか？」

そうです、と少年は首を縦に振って肯定する。

「……若に殺される」

途方に暮れて、がつくりと肩を落とした。

「これですぐにでも帰れるはずなんですけど……」

今すぐ帰すわけにはいかない、という態度を示す。

楓は笑って、少年の頭をぽんぽん叩く。

「わーかってるって。その友達助けるんだろ？　こうなった以上、手伝ってやるよ」

それを聞いた少年の顔はパツ、と明るくなった。

「本当ですか！？」

「男に二言はねえ」

若がよく使っていた言葉を、格好つけて言う少年が懐かしそうに「オレの友達も、よくその言葉を使うんです」と笑った。

「ちよつと素直じゃないけど、面倒見も付き合いも良くて、しゅ……友達が転んだりするとお世話とかしてくれているんです」

なんだか若と殿先生みたいだと思って、楓も吊られて笑った。

「あ、オレのそこにもそんな感じの人たちいるわ」

二人でのどかに笑って、ふと思つて楓が聞いた。

「オレ、楓っつーんだ。お前の名前は？」

少年は、ふわりと目を細めて名を名乗った。

「鷹斗。海棠、鷹斗です」

「よし、鷹斗か。それで、助けなきゃならない友達ってのは？」

「あ、はい。ええと……」

聞くと、気まずそうに鷹斗は頬をぱりぱりとかく。

「実は、会わせてくれるっていう人を見つけたんですけど、待って
いられなくて飛び出してきちゃったんです。あの様子だと、もう助
けられたみたいで」

「はあっ!？」

「あはははは」

「あはは、じゃないだろ！ 何考えてるんだ！」

さわやかな笑顔の鷹斗に、突っ込んでしまう。

「とりあえず、オレが待つように言われた場所まで行きましょう。
もしかしたら、彼女もいるかもしれない」

「お？ お前が助けに来たって女なのか？」

もしかして、とニヤニヤして小突きながら鷹斗に聞くと、照れく
さそうに少年は頬を朱に染める。

「……あはは」

「……なんか、そんなマジな反応されるとちょっと困るんだが」

あまりにも純情すぎるそのリアクションに、正直困ってしまった。

「と……とにかく、行くぞ」

「あ……はい」

鷹斗に道案内をされないと行く先なんてわからなかったが、先に
行く。

後ろから、鷹斗の小さな足音が聞こえてきた。

「……ったく」

壊れた世界ではこんな素直な反応をする人間なんて少なくて。

「どうして笑っているんですか？」

ひょこ、と楓の顔を覗き込んだ鷹斗の言葉に「笑ってねーし！」
と言ってそっぽを向いた。

でも、頬が緩んでいたのに楓は気づかなかった。

「……妥当、政府のためにも頑張らなきゃな」

そう、一人ごちた。

第一九幕「楓の大冒険その2」(後書き)

撫子「私が主人公なのに、私の出番が全くないんだけど」
鷹斗「そうだね。撫子の出番をもっと増やすべきだよ」

……「ごめんなさい。」

第二十幕「月明かりの人影」

撫子は、話せない青年に手を引かれながら歩いていた。

道路のない道や、古い木の匂いがする建物。月明かりの光しか明るくもない、夜。それを見てやっぱり自分がいるのは別の世界なのだと感じて少し胸がしめつけられるような気持ちになる。

じっと歩いているだけでは落ち着かなくて、撫子は話せない青年に声をかけた。

「あの……あなた、どうして私を助けてくれたの？」

返答はないのはわかっていても、聞かずにはいられなかった。

青年は撫子の言葉に立ち止まり振り向いて、薄く笑った。

青年は懷から、一メモ帳とシャープペンシル（……………

……………）を取り出し、ページをめくって文章を少し慣れない仕事で書いた。書き終わったらしく、メモ帳を撫子に見せた。

【お前の友達に頼まれた】

「友達って、誰？ ……この世界には、私の友達はいないはずよ？ それに、どうして私だってわかるの？」

再び青年は、メモ帳に文字を綴って撫子に見せる。

【髪の長い女で、新撰組にいとだけわかれば十分だ】

「それもそうね……。というか、友達って誰なの？」

【お前の世界から来た子どもだ】

その文字に、撫子は目を見開いた。青年の肩をつかみ、拳に力を込めて見上げる。

「私の世界って……もしかして、課題メンバーのみんな!？」

そこでようやく、この青年がこの時代にあるはずのない道具を持っていることに気が付いた。撫子にとって当たり前すぎて意識に留めていなかったが、撫子のいた世界からこれを持ち込んだ人物がいるはずなのだ。

恐らく、危険を侵して自分を追ってここまで来た。

それに、涙がこみ上げてくるぐらい嬉しかったし同時に何かあったらどうしようという思いに捕らわれる。

【それがなんなのかわからないが、一人だけだ。俺の友達……新撰組の監査をやっている人間が保護して、俺のところへ預けた。あいつは探してやるって言っていたが、どうにも落ち着かない様子だったんで俺が様子を見に来た】

「名前……名前は……!? 誰が、誰が来たの!？」

【名前は聞いていない】

「……そう」

撫子はがつくりと肩を落とした。

【それに、行けば会える。心配するな】

「そう……よね」

撫子は掴んでいた手を離し、地面へと視線を向ける。そうだ、会える。自分の知っている人間に。そう思うと、少しだけ安堵した。

【じゃあ、いくぞ】

そう書かれて、歩き始めた青年に撫子は慌てて声をかけた。

「ねえ……っ!」

彼は不思議そうに振り返って、撫子を見つめた。

「助けてくれて、ありがとう。それと、あなたの名前は？」

その言葉に、青年は気のよさそうな苦笑いをして再びメモ帳に字を書き始めた。

【伊吹龍之介】

「そう、私は九楼撫子よ。伊吹さん、本当にありがとう」

【俺はたいしたことをしていない。それに、あの状態だったら俺は他の新撰組のやつらに姿を見られていたかもしれないしな。ちなみに、あの塀の隙間は俺がむかしあそこにいたときの秘密の抜け道だ】
「姿を見られていたかもって……」

【俺、ちよっと前にあそこにいたんだ。そのときに、死んだことになったんだ。この喉の傷も、そのときにできたものだ】

龍之介は痛々しい傷跡に手を伸ばして、そつと撫でた。どこか懐かしいような、やわらかい双眸。ふ、と伏せられた目元に現れるは悲しみの感情。

【土方さんが、俺を生かしてくれた。……少しは手伝えればと思つて、お前達に手を貸したんだ】

「……厳しそつだったけど、面倒見の良さそつな人だったものね」

【めっちゃめっちゃ厳しいけどな】

その文字に、思わずぶつと吹き出して笑つた。龍之介も、吊られて笑つた。

「……少し、気が楽になつたわ。ありがとう。案内してもらえるかしら？」

龍之介は齒を見せて笑い、頷いた。手招きして、撫子に道案内をする。

龍之介がいつも住んでいる建物はそこから少し離れた場所にとあつた。

「……………？」

がらり、と古い扉を開けると暗く静かな家の中だった。

「……………！！」

龍之介がはつとして、靴のまま家の中へと上がる。その表情はとても固い。

「ど……………どうしたの！？」

慌てた様子で駆け出した龍之介を追うと、彼は白い紙を持つたまま立っている。

「なにが……………書いてあるの……………？」

胸がざわついた。恐る恐る聞いたその声に、龍之介は震える手でその紙を撫子に手渡す。

「『ごめんなさい。我慢できませんでした。探しに行つてきます。海棠鷹斗』つて、鷹斗っ！？」

弾かれるように龍之介の方を振り向くと、彼は怒りをあらわにして近くの壁を殴る。唇をかみしめ、舌打ちをした。

「そんな……鷹斗っ！」

悲鳴にも似た声が撫子の喉から漏れる。

せつかく、知っている人間に会えると思ったのに。それに、こんな危ない場所に一人自分を捜しに行くなんて。

「どうすれば……」

身体力が抜けて、その場に座り込む。

その視界に、すつ、と龍之介が言葉を綴った紙が入る。

【あいつの起こした行動は腹立つが、きっと戻ってくるはずだ。ここで待てる】

それを撫子に見せると、龍之介は玄関の方へと向かっていた。

「あなたは……どこにいくの!？」

【ちよつと、家の周りを探してくるよ。迷子になってるかもしれないしな】

苦笑して、撫子の頭をガシガシと撫でた。

【それにお前、まだガキだろ？ 山崎から成長してるって聞いてはいたが、中身はガキのままなんだ。こんな夜中に外に出るなんて危ないだろうが】

「し……小学6年生は確かに子どもだけど……そう言わなくなつたて……」

眉を潜めて抗議すると、さらに龍之介は笑って撫子にデコピンした。

「いた……っ」

【いいから、黙ってそこにいろよ】

背中越しに手を振って、龍之介は行ってしまった。

静かな部屋に一人取り残された撫子は、鷹斗の書いた紙を抱きしめる。

「鷹斗」

嬉しくて、不安で、どうしようもなかった。

「……鷹斗」

撫子声が、虚しく響き渡る。外から吹く風が木の葉を揺らす音が

聞こえて、それがどうしてもか不穏な感覚がした。

それがどうしても気になって、撫子は立ち上がる。

「家の前に出るぐらいなら……」

そう思つて、玄関へと足を運ぶ。

涼しい風が頬を撫でて、思わず息をついた。髪を結んでいる紐も解いて、夜風にその長くて黒い髪をさらす。風で髪が舞つて、涼しい。

「……全然知らない場所に來たのよね」

目の前の景色は撫子の知っているものとは全然違つていて。

右手を満月へと伸ばす。月が、星が、輝いてとても綺麗だった。

「壊れたあの世界では、こんな景色なかったわね」

毎夜夢に見る、壊れた世界。

そこと、ここはどうしようもないくらい違う。

「俺を置いて逃げるとか良い度胸してるよね」

突然、声が上がから振つてきた。

聞き覚えのある、中性的なこの声は。

「薫さんっ!？」

上を見上げると、屋根の上に薫が立つている。着物の裾を揺らし、怪しげに微笑している。

「どうしてここが……?」

「さあね。それより、ここから逃げた方が良いんじゃないの?」

「それはどういう意味……?」

撫子の言葉に返事をせず、薫が遠くを見ながら言う。

「さつきね、沖田の姿を見かけたんだ」

その言葉に、ぞわりと寒気がした。嫌な予感を感じる。

「だから、俺を追つてきた羅刹達をおびき出してちよつとばかり暴走させたら面白いかなんて思つたんだ」

そう言つて、赤黒くにじんだ着物を見せる。そこから見える肌に

は傷一つ無かったが、今ここに来る前にそこから血が流れていたことを撫子は悟る。……目の前で、傷が塞がるのを撫子は見ていたのだから。

「血の臭いがする方向に、羅刹が来るから……さ」

「羅刹って……」

聞き慣れない単語に、首を傾げる。薫はそれでも良かったみたいで、手に持った刀で自らの腕を切った。月の出る夜空に薫の血が舞って、それが撫子の足下に、そして撫子自身へと雨のように降りかかる。

生臭い血を浴びて、撫子は顔をしかめる。

「……なに、を！」

「お前も急いで逃げた方がよいよ。……ただし、その状態じゃあ逃げても追われるだろうけどね」

そう言って薫は後ろを向いて、体重を感じさせない身のこなしで行ってしまった。

「どういうこと……なの？」

薫が消えてしまった方向を見ると、後ろから足音が聞こえてきた。

「伊吹さん……？」

恐らく、このあたりを回っていた龍之介だ。そう思って、振り返る。

「血……血を、よこせえ……」

「だ……誰!？」

そこにいたのは、龍之介ではなかった。髪の色が真っ白で、目が赤い知らない男性。その表情はどう考えても正気を保っているようには見えない。その手には、抜き身の刀が握られている。

「あ……」

恐怖で、後ずさる。石につまづき、地面に尻餅をつく。それでも、視線はその男から話すことができなかった。

男は一步一步と、撫子へと向かってくる。

身体が震える。立ち上がって逃げたいのに、立ち上がることさえできない。心臓がばくばくと鳴って、命の警報を鳴らしている。でも、動けない。

「だ……れか」

無意識に、かすれた声が喉からしぼりとるように出た。

「助けて……」

月の光に輝く抜き身の刀が、どうしようもないくらい綺麗に思える。

「た……かと、り……いち、ろう……、みん……な」

男が、その刀を撫子に振り下ろそうとする。

その動作がともゆっくりに見えて、でも指一本動かすことなんてできなくて。

吸い込まれるように綺麗な刀から、目が離せない。

刀が、振り落ろされた。

第二十幕「月明かりの人影」（後書き）

撫子の出番がやっと回ってきました。

都合上、いつもいつも危険な目に合わせてごめんなさい。

そして、シリアス会が続きます。

第二一幕「政府メンバーと斉藤さん」(前書き)

ネタバレありーのです。

第二一幕「政府メンバーと斉藤さん」

「それで……撫子はどこにいるの？」

「そんなのボク、知っているはずじゃないですか」

『はー。山崎くんの話聞いていませんでしたからねー、八方ふさがりですねー』

格好つけて歩み出したが良いが、早速政府組3人は困っていた。

神賀は困った顔をして、ビショップに微笑む。ちなみにここではキング、と表記しても本名で表記しても良いと思うが本名だといろいろとかぶるのであえて神賀にしてある。

「うーん……どうしようか。なんとかしてくれるよね、ビショップ？」

「ボクに押しつけないくださいよ。なんでボクに頼めばなんでも解決してくれるかと思っっているんですか。ド えもんじゃないんですよ、ボク。四次元ポケットとか持っていないんですよ」

『ビショップは働き者ですからねー』

「レインさんも、同意しないでください」

ビショップはふう、と困ったように息を吐いて頭をぼりぼりかくと「とりあえず、新撰組の屯所つてところはもう把握してるんでそっちに行きましようか」と言った。

『さすがビショップですねー。まあ、ボクも地図を把握していましたが』

「さすがビショップ。俺も、地図を把握していたけど」

「……あなたたち、ボクをいじめたいとしか思えないんですけど。なんですか、その天才は凡人に叶わないとかそーゆーことを無言で訴えるような態度は」

「そんなことないよ？ 可愛い部下をいじめるなんて上司どこにもいないよ」

『そうですよー。可愛い後輩をいじめる先輩がどこにいるんですか

「？」

「……もういいです」

脱力してがっくりと肩を落としてビショップがそう言った。

「そういえば、ビショップ。こちらの世界の斉藤一さんと仲良くなつたんだって？ 良かったじゃないか。俺も、君に親しい友達がないことを気にしていたからとても嬉しいよ。……なんでも、撫子の自慢話をしていたとか」

その言葉にぎくり、とビショップが反応してぎこちない顔で神賀の方を無理向く。神賀の声も顔も笑っていたが、目は笑っていないかった。

生命の危機のようなものを感じたのか、頬に流れる汗は隠せないまま無理矢理声を押しつけようといった様子で答える。

「別に、仲良くなっていますから。声がかぶっていてむしろ邪魔です。それに、自慢話なんてしていません」

「そうだ。俺は別にあんと友人になつたわけではない。声が同じでむしろ迷惑している。それに、自慢話ではない。添い遂げる女性のすることについて話をしていただけた」

「そーですよ。添い遂げる女性の自慢話を……」

はた、とビショップが凍り付いた。

「……やっぱり、そうなんだ。君、撫子とそんなに仲良くなるんだっけ？」

『あらー。キングの嫉妬モード入っちゃいましたねー』

どす黒いオーラに身を包みながら、笑顔で神賀はビショップの肩をがし！つつかむ。

「ちょ、ちょ！ 待つてくださいよ！ キング、あなたボクのルートでは潔かったじゃないですか！ なんでそこで嫉妬モードなんですかつ？」

『今のキングは、ビショップルートのキングじゃないですからねー。それに、本編でも一時的にビショップに預ける扱いだったじゃないですかー』

「いや、それはそーですけど。キングの誘いを断った撫子さんにいちいしょんぼりして、うっとーしーキングの相手をさせられたのはボクでしたけどっ!」

「だって、撫子が円のことばかり考えるし」

「……お前、円という名だったのか。案外おなごのような名前なんだな」

「さりげなく本名バラさないでくださいよ。それと、誰も突っ込まないけどそーいうこと言わないでください。気に入ってるんですから、この名前。というか、いつの間にかいたんですか、あなた」

「あ」

『あ』

そこでようやく、政府組3人以外の人間がいることに気が付いた。そこに立っていたのは、黒装束の男。斉藤一だった。

『声が同じで気づきませんでしたねー』

「お前達の話が一段落付くまで待っていていようと思っていたが、そうも言えない状況なのでな。それに、副長をどうした。その男は一体誰だ?」

抜刀の体勢で神賀をみやり、鋭い目で睨む。

神賀は笑いながら、降参のポーズを取る。

「君の上司は、ちよつと俺達の世界へと行ってもらったよ。近藤って言う人を迎えに行くみたい。それと、俺はこの二人の上司で、神賀旭です。秋霖学園では教師をやっています」

「……うさんくさい笑顔だな」

「そう思われても仕方がないけど、警戒は解いてもらえると嬉しいな」

「うさんくさい、っていう点なら同意しますが、一応この人上司なんで納めてくれませんか? それにこの人が万が一あなたに危害を加えようとしても、洗脳能力ゼロの神賀さんはあっさり返り討ちにされますし」

『あーはいはい。話が進みませんね。それで、どうしてあなたがこ

ここに？ 先ほど『羅刹』って呼んでいたものを追いかけて行ったんじゃないかったでしたっけ？』

「ふむ……それなのだが」

斉藤が顎に手を乗せて、話し始める。

「お前達のうしろに、その羅刹がいる。だからこの体勢なのだが」

「は」

「え」

『あ』

三人が同時に声を上げた。

恐る恐る後ろを振り返ってみると、そこには一人どころではなく十数人の白髪の男たちが姿を現していた。その全員が腰の刀を抜いていて、その刃と瞳に狂気の色を浮かばせていた。

「血をよこせえ……」

「血だあ……人間の、血だあ……」

「はやく、はやく血をお……」

そう口々に言う男達に、斉藤が極めて冷静な声で状況を分析する。
「ふむ……数を減らすことができるが、お前達を守りながらは戦えない」

「え、それって見捨てる宣言？」

『そんなカンジですねー』

「っていうか、羅刹ってなんなんですか？　なんでボクたち、襲われそうなんですか」

斉藤の言葉に3三者三様の反応をする。

「羅刹は心臓を貫くか、頭部を跳ねとばさない限り、傷を付けても肉体が再生し続ける化け物だ」

「ねえ、レイン。これ、研究の応用に使えたりしないかな？」

『そうですねー。サンプルがあれば、研究しがいがありますよねー』
齊藤の言葉を聞いて、だいたい理解したのか神賀とレインがそんなのんきな会話をする。

「今はそんな状況ではないと思うのだが……」

「まー、あの二人はいつもあんな調子ですから」

そう言っていると、羅刹の一人が遅いかかってくる。その先は、神賀旭。

「あ」

短くそう言った神賀に、大柄な男の影がかかる。白刃がきらめき、その死の刃を彼の肉体に向かって振り下ろす。

「……何やっているんですか！ あの人は！」

ビショップが一步大きく踏み込み、その長い足で白髪 of 男の頭部に向かって回し蹴りをする。刃は神賀には届かず、白髪 of 男は勢い良く飛ばされた。

だが、すぐに立ち上がって狂気に満ちた瞳でこちらに向かってくる。

「これで、並の人間なら脳しんとっ起こすはずなんですけどね……」
面倒そうにぼりぼりと頭をかくと、また羅刹に向かって攻撃を繰り返す。だが、あくまでも打撃の攻撃なので羅刹には一向に効く様子はない。

「俺一人ではお前達を守りきれない。行くぞ」

齊藤が羅刹の一人を切り伏せ、短くそう言うど街道を駆ける。

「なんですか、あなた。守ってくれるんですか？」

ビショップがいぶしぎな表情で齊藤に問うと、齊藤は表情を動かさずに答える。

「……お前達がいないと、副長も……雪村も帰ってはこれないからな。羅刹達を誘導し、少しずつ数を減らしていく」

「あー、そうですね。ほら、キングも行きますよ」

「俺、こういう体力仕事苦手なんだよね」

「そんなこと言っている場合じゃないでしょ」

「だって……」

「なんでそこでしょんぼりしているんですか。なんで捨てられたチワワみたいな目で見つめるんですか。全く持ってうつとーしーですよ」

ビショップが苛ついた様子で神賀の手を引っ張る。それを見て斉藤が同情したように。

「……お前も、いろいろと大変なのだな」

「本当にあなたの上司と交換して欲しいですよ。……そもそも、元からあなたの上司みたいな人がキングだったら、こんな自体にはなっていないかっと思えますけどね」

どこか遠いところを見るように、ビショップが苦笑いを浮かべた。
『土方さんのようなキングって、想像できませんしねー』

「うん。俺はどちらかと言うと、近藤さんっぽいイメージだと思うし」

「どこの口が言っているんですか、それ。どっちかと言うと、薰っぱいじゃないですか、あなた」

愛が行きすぎて歪んでしまうあたりとか、とビショップは無言で付け足す。

「えー、そうかな?」

「……むしろ、そちらのウサギの方が当てはまっている気がするかな」

斉藤はそう言って、レインを見やる。

『あはは。そうですかねー。まあ……そうかもしれませんねー』

レインはどこまでもものんきな声でそう答えた。

第二一幕「政府メンバーと斉藤さん」(後書き)

政府メンバーの会話楽しいです。

……そろそろ、息切れしそうで困ってます。ゼー……はー……。
これ、終わるのか……？

番外編！「撫子に相応しいのはどっち？」（前書き）

ネタバレをかなり多く含んでいる番外編です。

番外編！「撫子に相応しいのはどっち？」

「あおう……ここってどこなんだろう？」

「わからない。というか、薄桜鬼の主人公であるお前がなぜオレと同じ空間にいるんだ。本編ではほとんど会話することなく通り過ぎて行ったはずだぞ」

「どうしてでしょうか……」

見たことのない場所に、薄桜鬼の主人公である雪村千鶴と、CLOCK ZEROのキャラクターである加納理一郎が呟いた。

どういうわけか、学校で置いてあるような長机と折り畳み式のイスが5脚ほど用意されてある。

「それはね」

「きゃっ！」

「うわ！　なんだ、お前か鷹斗」

二人の後ろにはいつのまにか、CLOCK ZEROのメインヒーローである海棠鷹斗が立っていた。

「うん。ちなみに俺と理一郎の二人は大人バージョンだからね」

「どこに向かって説明しているんだ……」

「それはともかく、重大な話し合いが行われるらしいよ」

「それはなんだろうか……？」

3人で「？」マークを頭の上に浮かべて思案していると、またもや突然後ろから元気な声がかかってきた。

「それはね。……鷹斗くんと、りったん。二人のどちらに美味しいシーンを取ってもらうか決めるためだよ！」

「お前は……！」

人の良さそうな風貌に、凜とした意志が伝わる瞳。胸にはお守りがぶらさがってる。そう、彼は……。

「央！ どうしてここに？」

「ふふふふ……CLOCK ZERO内の常識人といえばこのボク！ 今回の司会進行役を務めることになったのさ！」

「あ、そちらの世界ではお世話になりました」

千鶴は深々と央に頭を下げた。

「あ、いいいいいよ。これも正義のジャーナリストの仕事だからね」「というか、ここの時間軸はどうなっているんだ？ これはいわゆる”都合の良い空間”なのか？ あえていうなら、ドラマCDの収録後のような」

「そうだね。まさしくその通りだよ、りったん！」

「その呼び方はやめてくれ……」

「え、どうしてですか？ 可愛いと思いますよ。あ……男性の方に可愛らしいって失礼ですよ。すみません」

「央、ひとつ質問があるんだけど。それならどうして、千鶴さんもいるの？」

「あ……それもそうですよね」

鷹斗の言葉に納得して、千鶴も相づちをうつ。

だが、央は「ふふふ、それはね」と怪しい笑みを浮かべる。

「今、作者の妄想が暴走した結果書かれている。もしもCLOCK

ZEROの主人公が薄桜鬼の世界へ飛ばされてしまったら。』は、佳境を迎えているのはわかるよね？」

「そうだな。オレは沖田と合流してるし、鷹斗も薄桜鬼の世界へ来たし」

「今、撫子ちゃんがものすごいピンチに陥っているのもわかるよね」

その言葉で鷹斗は「なるほど……」とわかった様子で頷いた。

「鷹斗くんはわかったみたいだね。さすが王様」

「もうわかったのか。どういうことだよ、鷹斗」

「あの、私もお聞きしたいです」

「つまりね、雪村千鶴さん。君に決めてもらうためなんだ」

「は」

「え」

央はうんうんと腕を組んで大きく頷いた。

「この状況でまさか撫子ちゃんを殺すとかそういう展開がなければ、誰かが助けに駆けつけなきゃいけない。でも、それを誰にするか？

ということだよ」

「まさか……」

「そう、そのまさかだよ、りつたん」「りつたんはやめろ」

「オレと理一郎、二人のどちらかが撫子を助けるに相応しいってことを彼女に決めてもらうんだ！（どどーん）」

「そう！ ヒーローとして、撫子ちゃんを救うに相応しいのはどちらか……千鶴ちゃん、君に決めてもらうんだよ！」

「え……えええっ！？」

央にびし！ と指を差されて、千鶴は狼狽えている。

「作者は本当に悩んでいるんだ……。子ども鷹斗くんを登場させて、よいとこどりさせるのも良いけど、大人鷹斗くんも活躍させたい……。できればりったんも活躍させてあげたい……。って！」

「ちよつと待て。それはオレが二の次って前提じゃないのか。ならなんでここにオレを呼んだんだ。嫌がらせか？ 嫌がらせなのか？」

「え、だってメインヒーローって鷹斗くんって公式でも決まっているし。仕方ないよ。それにボクなんて攻略キャラクターでもないんだよ。CZメンバーの中で唯一ボクだけが攻略対象じゃないのに、りったんはそういうこというんだ？」

「う……。っ！」

「ただでさえ、幼なじみっていう美味しいポジション取っているのにボクにはそんなこというんだ……。酷いよ、りったん！」

わーっ、と央が泣き出してしまい、理一郎はおろおろとして「す……すまない！ お前の気持ちなんて考えずに……」「あ、いいよいいよ」「……………」ケロツと笑顔を向けた央に一瞬、理一郎が殺意を覚えた。

「ということで、千鶴ちゃん。はつきり言って、どっちが好き？」

「え……………」

「おい、待て。どうしてそういうことになる」

思わず突っ込みを入れたらしい理一郎に、はじけんばかりの笑顔で央が返す。

「だってそういうことでしょう。それで、千鶴ちゃんはどっちが好み？」

「…………これは困ったね。オレが撫子を助けるためには千鶴さんを誘惑しないといけないけど、オレの心は撫子一筋なんだ……。たとえば一

瞬でも、大根やゴボウのように見える他の女の子に手をだすなんて

……」

「さすが鷹斗くん、さりげなく失礼だね！」

「さりげないどころか、公に失礼だぞ」

だけれども千鶴は気にした様子もなく、むしろ遠慮した態度で。

「いえ、いいんです。私、みなさんのお役に立てることなんて少ないですから」

「千鶴ちゃん良い子！」

「鷹斗、お前も見習え」

「え？」

「え？　じゃないだろ。お前、子どもバージョンのときは純粹で黒いシーンとかほとんどなかったけど、大人鷹斗になった瞬間、墨よりドブより黒い腹になってるだろうが」

「大人になって恥ずかしげもなくデレまくるりったんが言うセリフじゃないよね」

「……うるさいっ」

顔をリンゴのように赤らめて、理一郎はそっぽを向いてしまった。

「それで……どちらが異性として魅力的か、というお話しでしたよね？」

「うんうん、そうそう」

「何かずれてきているような……」

ええと、と千鶴は深く深く考え込んだ。

かなりの難題に出くわしたような顔でしばらくうなっている、意を決したように決意を込めた瞳で3人を見つめた。

「決めた？　じゃあ、言ってもらおうかな」

「当然、撫子を愛しているオレだよな」

「お前、本当に傲慢だな」

「そりゃあ、世界壊すほどだからね」

「でも、オレだってあいつを想う気持ちは鷹斗には負けない」

「……円が聞いたら、どんな反応するだろうなあ」

央はここにはいない弟を想い、なま暖かい目で遠い空を見上げた。
空なんてないが。

千鶴はこくりと頷いて、その凜とした声を響かせた。

「決められません」

「え」

「は」

「あ」

呆然と反応した3人に、千鶴はなお続ける。

「その……鷹斗さんも、理一郎さんもとても素敵な方です。お二人とも撫子さんのことをよく想われていて、とても素敵だと想います。撫子さんは、そんなお二人に想われて幸せだと想います。だから、私では決められません」

さらりと、千鶴の黒い髪が揺れた。

「お話しの都合上、お二人が会ってしまうのはいけないこととはわかってはいますけど……お二人で力を合わせて撫子さんを助けてください。……それが、私の決断です」

央はあちゃー、と片手を額に当てて苦笑を漏らした。

「そう来たかー。まあ、そうだね」

「……そう、か」

「……それなら、まあ……」

鷹斗は若干しょんぼりした反応。理一郎はどこか気の抜けた様子だった。だけれども二人とも、どこか安心したような表情にもなっていた。

「ふふ……撫子さんは本当に素敵な方々と出会えて幸せですね。……私も、そんな素敵な男性がいれば良いんですけど」

そういつて、どこか寂しいものをにおわす雰囲気を出して言った。彼女には想っている人物でもいるのだろうか。その紡いだ言葉は、叶うはずの思いがあるような感じだった。

央はゆるやかに微笑んで、千鶴の肩を叩く。

「大丈夫だよ、千鶴ちゃん。君は君の想う人をずっと追いつけていれば、それで良いんだ」

「……はいっ」

頬を桃色に染め上げ、笑顔を浮かべて千鶴は頷いた。

そんな和やかな雰囲気、突然ノックの音が響き渡り、一人の少年が入ってきた。

「あの……ここで何が行われてるんですか？」

金髪に、純粹そうな赤い瞳。そこにいたのは、子どもバージョン鷹斗だった。

「……かわいいっ!」
「わっ!」

そのかわいらしさに思わず、千鶴はかけより抱きしめた。

「ねえ、あなた、名前は？ お姉さんは雪村千鶴っていうの」

すっかり子ども鷹斗に夢中になって話しかけている千鶴と、突然抱きしめられて狼狽えているながらも微笑ましく話をしている子ども鷹斗。

大人鷹斗と、理一郎はその場でがつくりを膝をついており、二人の肩を央が同情するかのようぽんぽんと叩く。

「……勝負、あつたみたいだね」

「同じオレなのに、どうしてこんなに敗北感があるんだろう……」

「……結局、オレはメインヒーローにはなれないのか？ なれないってことなのか!？」

というわけで、美味しいところは子ども鷹斗が持っていくということになり、大人二名はかなり落ち込んだという。

番外編おわり。

番外編！「撫子に相応しいのはどっち？」（後書き）

実は本気で悩んでいました。

この話のおかげで、決心が付きました。

第二十二幕「再会」

死んでしまう。

撫子は目をみひらいたまま、そうおもう。

でも、金色の軌道がよこから入り、予感していた衝撃はこなかった。むしろ、自分がよこへと飛ばされた。

「……きゃっ！」

あまりに一瞬のことで、なにがおきたのか理解することができなかった。

なにか暖かいものが覆い被されているのはわかって、暗い空が視界いっぱいにはひろがっている。

そのむこうで、着物を着くずした格好の男性が、さきほどの男をおさえこんでいた。

「うわ……あばれんなっ！」

しかし、すぐに振り落とされてその場に尻餅をつく。

「ひえええっ！」

その叫び声に答えたのは、あまりにもその場の雰囲気にあわない軽やかな声。

「あつはは。よくわからないけど、間に合ったみたいだね」

そこにいたのは沖田と、『だれかに似ている、夢の世界の住人』。

（どうしてこんなところに……）

そう撫子がおもっていると、沖田はまるで旋風のように駆け、腰の刀ですどい一閃を煌めかせていた。

耳を覆いたくなるような絶叫が男ののどから発せられる。

「みちや、だめ」

静かな、聞き覚えのある幼い声がちいさく耳元でささやく。

そうしてすぐに、小さな胸に視界をおおわれた。

きゅと抱きしめられて、あたたかい。

それからすぐに、なにかが勢い良く噴射されるような音がきこえる。

そうしてまた、絶叫。

この世のおわりのような、阿鼻叫喚。

なにがおきたのか、容易に想像することができた。

「ひとが……」

「だめだ。なにも、考えないで……撫子」

そこではじめて、撫子を守っている声の正体に気がついた。

「たか……と？」

「……うん」

どこか複雑そうな声が、撫子の言葉を肯定する。

「ほんとうに、鷹斗なの……？」

「あはは、心配できちゃった」

「鷹斗……っ！」

この状況の恐怖と、ずっと求めていた仲間に出会えてうれしく思う気持ちがいりまじって、撫子はその小さな身体に手をのばして抱きしめた。

「鷹斗……鷹斗……！ あいたかった……っ！」

「オレもだよ 撫子」

鷹斗が、あたまをなでた。その感触に、さらに切なくなっただけ抱きしめる身体に力をこめる。

「えーと、きみたちー。いちやいちやするのは良いけど、もう終わったよ。それに、もともとお子さまだってわかっていても、その図はちょっと危ない光景だよね」

「……あ……ご、ごめんっ！」

沖田の声が聞こえて、そこでようやく鷹斗は身体を撫子からはなして解放した。

さきに立ち上がった鷹斗に手をのばされて立ち上がったなら……。

「……あれ？」

（鷹斗って、こんなに小さかったかしら）

身長差が、かなりある。

「あ、そういえば私、大人の姿になっているんだったわ」
今更のように思い出した。

ちなみに、公式身長設定だと、子ども鷹斗の身長は145センチ。
大人撫子の身長は161センチあるので、16センチの差があることになる。

個人的な感想だが、成人女性として撫子はけっこう身長が高いと思う。

「でも、どうして鷹斗は私だってわかったの？」

そう聞くと、鷹斗は眩しいぐらいの笑顔で答えた。

「君なら、どんな姿をしてもわかるよ。だって、オレの大切な人だから」

「っ！」

心臓が跳ね上がった。

顔に熱がやどるのがわかる。どんどんほてっていく。

「おい、ハンパもん。あの恥ずかしいお子さまは一体なんなんだ」

「というか、オレとしてはお前がここにいることを聞きたいのだが

……。それと、その疑問に答えるのなら答えは簡単だ。あいつは無意識で恥ずかしいやつだからだ。そういう恥ずかしいセリフをさらりと言うやつなんだよ」

「あっはは、可愛いね。ボクも、千鶴ちゃんにそう言ってあげたら喜んでくれるかなあ」

「お前は明らかにからかう目的だろ……」

撫子と鷹斗のすぐよこで、3人がぼそぼそ話をしている。

鷹斗はその会話に気づいた様子で、とたんに慌てた様子で視線を右往左往し、うつむいて頬を朱に染めながら。

「もしかして、またオレ、恥ずかしいこと言った？」

ええとても、そりゃあもう、ものすごく恥ずかしいこと言ったわよ鷹斗。なんて言えなく、撫子はたよりなさげに、けどまだ顔を真っ赤にしながらふるふる横にふった。

「と……とにかく、迎えにきたよ。撫子」

「鷹斗……」

じーんとして、自分よりちいさい仲間を愛しく想った。

「あれれー、なんか面白くなさそうだね。りいち」

「ばかつ！」

なにか言いかけた沖田の口を『夢の世界の住人』。長いので、以下『コスプレさん』。おい、待て。それはやめろ。放浪者でいいだろう。そのネタをひっぱるのもうやめろ」。文章につっこみをいれるとは、すばらしいですね。放浪者さん。は、自分の手でふさいだ。

「オレは現時点では撫子にとって謎の人物なんだ。ネタバレするには、まだはやいんだ！」

「いや、でもハンパもん。それって有心会ルートでわかることであつて、この調子だと政府ルートに行きそうなお嬢はどうすんだよ（鷹斗と良い雰囲気だから）。政府ルートじゃ、ハンパ蒙の正体謎のままじゃなか」

「う……うるさいつ。ていうか、なんでそんなこと知ってるんだ！」

「インスピってやつ」

「マジか！」

「よくわからないけど、いい加減にボクの口から手を放してくれないかなあ。息苦しいんだけど」

「あ……すまない」

沖田はすこし苛立った様子で、コスプレ……もとい、放浪者の手をどかす。

「それより、本当に大人の姿なんだね。こんなに美人になるなんておもってもみなかったな」

それから歩んで、撫子のあごをあげた。

そして、顔が近づく。

「ええええと……」

その目にはどこか子どもにはわからない紫色の怪しい雰囲気かた

だよっていたが、返り血に濡れたままやられても、なんの感情もわかない。

「からかっているだけですか？」

こまっっている、と、沖田はおかしそうに笑って。

「あつははは。そうだよ。でも、君をからかっているんじゃないんだけどね」

ちらり、と沖田は鷹斗をみて、うしろの放浪者をみつめてそういつた。

「かなり効果があつて、面白いけど……。これぐらいにしてあげようかな。それより、大丈夫？ ケガ、ない？」

「あ……。はい。ありがとうございます」

ぱつ、と手をはなした沖田はさもおかしそうだった。
ふととなりにいる鷹斗をみると。

「……………」

「た……。たかと？」

「……………」

「鷹斗ー？」

すごい……。その、いままで見たことがないぐらいの冷たくて無感情な目で沖田をみつめていた。

何度か名をよぶと、ハッ、と夢から現実に戻ったかのように少し目を大きくして、撫子に向かうとほがらかに笑いかける。

「あ、ごめん。気づかなかった」

（鷹斗がこわかったような……）

黒いオーラのようなものまで見えた気がする。

それが後に恐ろしい嫉妬をする大人になる前兆だとは、撫子は気づかない。

（気のせいよね）

そう思い直して、今度は放浪者のほうをむくと、どこか複雑そうな顔をして手をふるふるさせていた。

（なにか、思い悩むことがあったのかしら？）

自分の学校に入り込んだ変質者だとはおもっても、その表情にどこか同情して撫子はそう思う。

二名の行動の理由が自分とはつゆとも知らず。

「大丈夫大丈夫。ボクは女の子に興味ないからね。……ひとりを除いて、ね」

第二十二幕「再会」（後書き）

久しぶりの投稿です。

子ども鷹斗の嫉妬モード。絶対可愛いと思います。うん。

さて…CZのノベル化が決定したり、ドラマCD第二弾が決定したりと忙しいですね。

それに、GREEの薄桜鬼もプレイしなければ…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8495u/>

もしも『CLOCK ZERO』の主人公が『薄桜鬼』の世界へ飛ばされてしまったら

2011年9月12日03時31分発行